

ひとつながれてくみてしりなば

◎弘教

在國禪師

此の法のうへみぬ鷲の山櫻

花を都の外につたへて

◎一微塵出大千經

行誠上人

ちりのよと拂ひすてゝぞ限りなき

法もそこよりあらはれぞする

◎長別三界苦輪海

肩 上

山里の朝げの煙よそに見て

たちわかれゆく峯の横雲

もねのぼるほのほの門をあどにみて

引きはかへさぬ法の小車

◎彌陀四十八願

極樂の彌陀の誓にすくわれて

千觀法師

漏るべき人はあらしとぞ思ふ

◎同

舟しあれば千曳の石も浮ぶてふ

兼好法師

誓の海に波たつなゆめ

◎同

ひと度も南無阿彌陀佛と云ふ人の

空也上人

蓮の臺にのぼらぬはなし
◎發菩提心

埋火のきゆるばかりもれこさなん

◎行誠上人

れこし兼たるわが心かな

◎至誠心

春は花秋は紅葉のいろくも

◎同上

世にいつわらぬためしならずや

三七 佛陀に就て

◎佛身

見ぬ昔なるは佛の身なりけり

◎慈鎮和尚

その身は人の心にぞすむ

◎寂光淨土

しづかなる光のみこそ隈なけれ

◎同上

如何にいふべき都なるらん

◎悉皆成佛

れしなへて御法の花の咲きしより

◎同上

佛の身とはみななりにけり

◎往生淨土

いきながら彌陀の誓にのりのふね

◎他阿上人

さして終りを待つぞうれしき

◎光明無量

いづくにも有明の月はさやけきに

◎兼俊頼

◎壽命無量

いと朝日のひかりそふらん

もよおせも祈ることろのはかなさよ

◎法然聖人

南無阿彌陀佛の無量壽なるに

◎來迎引接

極樂を思ふことろのけむりこそ

◎惠心僧都

迎ひの雲とやがてなるらめ

◎同

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

◎法然聖人

いつ紫の雲に見るらめ

◎供養如意

かぎりなき三世の佛のことろにて

◎兼好法師

あくまで花を手向けつるかな

◎光明遍照

世をてらす光りは人をつかねども

◎實教師

我が身にくらき法の燈火

◎往生淨土

露の身にこゝかしことてきへぬとも

◎法然聖人

心は同じ花の臺ぞ

◎解脱

雲にたゞ今宵の月をまかせんと

◎西行法師

いとふとしても晴れぬものゆへ

◎佛心者大慈悲是

あはれみをもものに施す心より

◎傳教大師

外にはとけのすがたやはある

◎遠離穢土

娑婆の苦も消うせぬるぞ有難や

◎高橋小十郎

まじかく見ぬし彌陀の浄土へ

◎彼岸

彼の岸を願ふ心やしるからん

◎源頼政

うれしくよする法の船かな

◎佛國

火の中にやかれてつきむ世ありとも

◎佛國は安らかにして

◎本來佛

燈火の消れて何國にかへるらん

◎夢窓國師

くらさそ本の樓家なりけり

◎悉皆成佛

峯の色谷の響もみなながら

〔承陽大師〕

釋迦牟尼佛の聲と姿と

○淨土

苦しみも長しとぞさらに石清水

〔源俊賴〕

名にながれたる彌陀の御國は

○五劫思惟

つみ深き人の爲めれや思ひけん

〔弘法大師〕

いつしの岩を撫で盡すまで

○一蓮托生

深草の露のかごとを忘れずは

〔深草隆信上人〕

同じ蓮の契りかわらじ

○此土成佛

露の身のまだ消ぬよりころこそ

〔頓阿法師〕

花の臺にまづ宿りする

○欣求淨土

いつか又世を浮雲の外にみん

これより西にすめる月影

○如何佛

いかなるか佛と云ひて人間は

〔道元禪師〕

夏火やがもとにつらくいにけり

◎慈悲

慈悲の目に悪くしと思ふものぞなき

罪ある身こそなほあはれなり

佛とは何をいはぬの菩提

慈悲より外にしくものぞなき

◎花の臺

願へた誰もきゆへき露の身の

れき所なる花の臺を

◎月に寄せて

れしへ置て入りにし月のなかりせば

〔袋中和尙〕

〔皇后宮肥後〕

いかで心を西にかけまし

◎同

心をばかねて西にぞれくりぬる

我が身をさそへ山の端の月

◎夢覺

夢の世とまればかくまれ歎くまじ

さめて臺に上る身なれば

◎題しらす

はては皆うてなの露の玉なれや

誰かはつひに消え残るべき

〔從三位親子〕

〔無能上人〕

〔橋千麿〕

◎入涅槃

今もなほ曇りて空にのこるらん

◎行誠上人

其きさらぎの望月のころ

◎淨土

阿彌陀佛こゝを去ること遠からず

◎松島雲居禪師

迷へばはるか西にこそなん

西の方本來空に往生し

無量の壽をば得るを目出度き

三八

罪惡を觀じて

れろろしき地獄の底の鬼とても

◎行誠上人

己がふき出すものと知らずや

果もなくなれもひあがりし心より

アソラとまでの名はれひにけむ

袖ぬれしみぎわの波も音かへて

ほのうばかりぞみねわたるなり

五月闇木の下道はくらきより

くらきに迷ふ道を苦しき

腹たちし時は此世も後の世も

人をも身をも思ひ忘れつ

慾ふかき人の心とふる雪は

つもるにつけて道^{みち}を忘^{わす}るゝ
愚^{たろ}かなる心^{こころ}一つの行^ゆく末^{すえ}を

六^むつの道^{みち}とや人^{ひと}のふむらん

皆^{みな}人の心^{こころ}の塵^{ちり}のつもりてや

高^{たか}き劔^{つるぎ}の山^{やま}となるらん

法^{のり}の水^{みづ}そゝがざりせはもれ易^{やす}き

胸^{むね}の炎^{ほの}をいかにけさまし

吹^ふく時は音^ねさわがしき山^{やま}風^{かぜ}の

吹^ふかざる中^{うち}は何^{なん}となるらん

身^みを思^{おも}ふ人^{ひと}の心^{こころ}の闇^{やみ}路^ぢこそ

藤原藤房

他阿上人

暗^{くら}きより猶^{なほ}暗^{くら}きには入^いれ

いたづらに胸^{むね}のほのうをほやしなば

終^{つひ}に我^{わが}身^みをこがすなるらん

思^{おも}ふまゝ心^{こころ}に罪^{つみ}をつくらせて

我^{われ}と地^ち獄^{ごく}につきれとすなり

心^{こころ}から邪^{よこしま}にふる風^{かぜ}はあらじ

風^{かぜ}こそ夜^{よる}の窓^{まど}をうつらめ

たゝへつる水^{みづ}には色^{いろ}のなきものを

風^{かぜ}の姿^{すがた}や波^{なみ}と見^みゆらん

露^{つゆ}ふかきあさじが原^{はら}に迷^{まよ}ふ身^みの

目蓮上人

他阿上人

婆 婆

いと暗路やみぢに入るぞかなしき
さやかに心こころの月つきはみゆべきを

○行誠上人

はれぬや胸むねの烟けかりなるらん

○西行法師

澄すみわたる月つきは我身わがみをもらせども

無明みみょうの闇やみのみせぬなりけり

○西行法師

三九

人生じんせいを觀くわんじて

心こころから心こころの物ものをねもはせて

○西行法師

身を苦くるしむる我身わがみなりけり

○空也上人

はねばはねれざらばれざれ春駒はるこまの

法のりのしるべはしる人ひとぞしる

我が心地水こころちみづにこそ似にたりけれ

○源空上人

濁にごり清すむこと定めなくして

汲くみ上あて見みれば色いろこそなかりけり

○貞信尼

紅葉もみぢ流ながるゝ白川しらかはの水みづ

こしかたは一夜いちやばかりの心地こころして

○貞原益軒

八十路やそぢあまりの夢ゆめを見みしかな

已おのが身みの已おのが心こころに叶かなはぬを

○和泉式部

思おもはれ物を思おもひしりなん

浮世うきよにはかゝれとてこそ生うまれけめ

○隱岐院

理ことばりしらぬ我わがなみだかな

悪しとも善しとも如何に云ひはてん

○法大師

折々かはる人の心を

昨日と云ひ今日とくらしてあすか川

○紀貫之

流れて早き月日なりけり

迷はじと思ひながらも迷ひけり

迷ひの中の迷ひたごりて

○刑部卿範兼

はかなしなかしらの雪は消ねはて

たま〜残る露の此身は

○梅壺の女御

明日までもあるべきものと思はねば

今日ひぐらしの聲ぞかなしき

長き夜の眠りの中に又眠り

○無住上人

夢の世に尙夢を見るかな

曉の鐘は枕に響けども

○内大臣 基

浮世の夢はさめんともせず

こゝに消わかしこに結ぶうたかたの

○無能上人

よるべ定めぬ身を悲しかる

塵の世を稍となして木傳ふは

○行誠上人

なにの心の山猿ぞかし

荒れまわる意の駒はいくたびも

○肩 上

鞭うちてこそ進むとぞ聞け

いつの世のいつの時にかふしそめて

○解脱上人

久しくさめぬ夢を見るらん

○國阿上人

ともかくも流るゝ水にまかせなば

○慈雲尊者

安かりぬべき塵の世の中

名利こそ魔王の釣の糸ぞかし

餌につく魚の身のはても見よ

目は霞耳に蟬なき齒は落ちて

雪をいたいく老の暮かな

憂きことのなほこの上につもれかし

限りある身の心ためさん

○熊澤蕃山

露の玉きゆれば又もあるものを

○西行法師

皆人の心の限り盡してし

後にそたのめ伊勢の神風

○孝明帝

世の中に猶有明のつきせじと

○崇徳帝

敵あらばいで物みせん武夫の

彌生中半の眠りさましに

○源齋昭

深き淵薄き氷の戒めを

○楠正成

心にかけてぬ人ぞあやうき

四〇 無常を觀じて

末の露本の雫や世の中の

後れ先たつためしなるらん

先達つも留るも同じ夢の世を

よそに驚く身さへ墓なき

露などを化なるものと思ひけん

吾身も草に置ぬばかりぞ

哀れまた今日も晩へになりけり

明日とは待たぬ命ながらに

墓なしやたもとの雫草の露

僧正暹照

玉葉集

業平

行生法師

ごこまでとてかなくれ果つべき

先立て憂めを見する人よりも

老て残れる身こそ憎けれ

徒らに過ぎにしことや歎かれん

受がたき身の夕暮の空

何迄も明ぬ暮ぬと營まん

身は限りあり事はつきせん

煙には誰もなるみのしれひ瀉

今日れも知らぬ身の終りかな

昨日見し人は何處と今日問は

慈圓僧正

慈鎮僧正

西行法師

一休禪師

谷たにふく嵐あらし峯みねの松まつ風かぜ

能因法師

あさし原はらまごふ黒くろ髪かみ昨きのう日ひまで

誰たが手て枕まくらの上うへに置おくらん

二遍上人

極ごく樂らくに生うれんことことを喜よろこばて

何なに歎なげくらん穢ねじ土つちのつらさを

新後拾遺集

鳥とり邊へ山やま知しるも知しらぬも哀あはれこと

ことことをあたまたまに立たつ烟けむりかな

眞淵

花はな紅こう葉えさそう色いろ香かを惜おしむまに

身みの春はる秋あきもすへの夕ゆふ風かぜ

成章

世よの中なかは水みづに宿やれる月つき影かげの

あるをありとも頼たのむべきかは
鐘かねの音ねに明あかぬと聞ききて悲かなしきは

僧契仲

終はらんとての始はじめなりけり

見みし人ひとは皆みな露つゆ霜しもと消きえ失うせぬ

西行法師

さて驚おどろかぬ我わが心こころかな

定家卿

夢ゆめかよ闇やみの現うつの宇う津つの山やま

有ある見みて見みるや世よの常つね手てに結むすぶ

後柏原院

水みづにさながら月つきを宿やして

憂うれき秋あきの紅こう葉えに漏もる松まつが枝えが

八條院高倉

百年待たぬ雪折れの聲
まくらには問ふ人あらば死出の旅

皇極天皇

泣々獨り行くと答へよ

慈鎮和尚

昨日見し人ぞと問はれ今日はなし

明日また誰か我を問はまし

紀貫之

春の日の光りに當るわれなれど

頭の雪となるぞわびしき

人の世に生れし今日は死出の山

旅路に向ふはじめなりけり

後の世と聞けば遠きに似たれども

知らずや今日も其日なるらん

定めなき世にも若きはたのみあり

兎にも角にも老の身ぞうき

兎に角に老もあまたの年を経つ

定めなき世に老の身ぞうき

明日ありと思ふ心はあだ櫻

夜は嵐のふかぬものかは

後の世と云へば遙かに聞ゆれど

いで入息のたゆるまつほぎ

肉包む皮には人の迷ふらん

後成

定家

親鸞聖人

後惠法師

一重の内は野邊の白骨

見るや如何に化にも咲ける朝顔の

花に先立つけさの白露

身を思ふ人こそ實になかりけり

憂かるべき世の後を知らねば

軒端より籬の草にかたかけて

風の吹まで蜘蛛の糸

露の身を嵐の山にれきながら

又來る春と云ふぞはかなき

昨日みし人もはかなくなりけり

○圓空上人

○小式部

夜の間よのまに散ちれる花はなにまかせて
草くさの葉はの露つゆにこの身みをくらぶれば
風かぜのままなる命いのちなりけり
生うれては遂つひに死しぬてふことのみぞ

○平維盛

見みよや人ひとあらしの庭にはの紅葉もみぢは
定めなき世よの定めなりけり

○平野國臣

吹ふきと吹ふく風かぜな恨うらみぞ花はなの春はる
いづれ一葉はも散ちらずやはある

○北條政氏

櫻花さくらばなさくごみしまに散ちりにけり
紅葉もみぢの残のこる秋あきあらばこそ

○源實朝

夢か幻か春の山風

ながめ來し花もむなしく散りはて

岡上

はかなく春の暮れにけるかな

紅葉を風にまかせて見るよりも
天江千景

はかなきものは命なりけり

明日までもあるべきものと思はねば
梅壺の女御

今日ひぐらしの聲を悲しき

春の花咲きては散りぬ秋の月
天輔

満ちては欠けぬあな愛の世や

現とも夢とも知らぬ世にしあれば
源實朝

ありとてありとたのむべきかは

つくぐと暮るゝ空こそ悲しけれ
道信

あすも聞くべき鐘の聲かは

何事もみないつわりの世の中に

死ぬるばかりはまことなりけり

れくごみし露もありけりはかなくて
和泉式部

消ぬにし人を何にたとへん

まさぐくに浮世の品はかわれども

死ぬる一つはかわらざりけり

明日しらぬ我身と思へど暮れぬ間の
絶貫之

今日は人こそ悲しかりけり

○行誠上人

時しあれば松も新となりぬなり

何を常盤のものと定めん

○寛 圓

あはれなり我身のはてや浅みどり

終には野邊の露と思へば

○赤染衛門

雨ふれば庭に浮べるうたかたの

久しからぬは我身なりけり

○南譽上人

獨り来て獨り去りぬる道なれば

つれてもゆけずつれられもせず

命をばいのりてのびる者ならば

雲の上人いかいかくれん
心細くいつまで我身ながらへん

○六條院女房大連

軒端にすがくさゝかにの糸

四一

忠孝に關する俚歌

主へ忠親へば孝の小槌より

よろづの寶打ち出すなり

しぶかりし親の異見も枝柿の

子を持ちてこそあまみをぞ知る

芋を見よ子に榮へよと親やせて

ぬぐうなりたりあまうなりたり

いにしへの三つの鏡を我が君の

くもらぬ世にや尙みがからん

君へ忠親へ孝行たのみます

内と外とのかわりあるまで

世の人がへつらひなりと云はれ云へ

君の御機嫌とるが奉公

御召なら腹帯も沓もかけず飛べ

君の御意には足をかへさま

下として上をはかるは無禮なり

しれたことでも御意を伺へ

鶏もひよこも道を造るとや

國家孝行々々といふ

君に忠親に孝ある人しあらは

箕笠もやろ榧も袋も

父母の目を盗みたる其報ひ

身のあとさきも見へぬ黒闇

子を思ふ親の重荷の四手駕籠

しばしも休む息杖はなし

四手駕籠かく難有き親の恩

ちからを入れて荷ひかへせよ

親にはなれ後悔するは常の事

賢き人は早う氣がつく

木に竹の無理を云ふともそこが親

いはしてれけや誰が笑ふとも

酒博奕遊女物ずきかりかさね

世間をふさぐ親の首がせ

學問と云ふもまことは孝の爲め

親を見すて何の學問

手も足もうんでもろうたこのからだ

せめて御禮に母の氣やすめ

賜はりし身に疵つけてすむものか

親へ對して何と云ひわけ

夏あふぎ冬は蒲團をあたくめて

身には着ずとも親を養へ

父母の恩山より高く底深し

うみの親ほど尊きはなし

父母につかふるうちは孝行を

朝夕まもれ末廣うなる

孝行を肌身心に離さずは

いづこへいても怪我はあるまじ

子を思ふ親ほど親をれもへた

孝だにたてば忠も身も立つ

膝元を離れず父母につかふべし

これ孝行の要めなるべし

親の恩仰けば高しさを知らはず

つかふ心は涼しかるべし

孝行のしたい時分に親はなし

世にある内に孝行をせよ

何事も親の心になへさる(庚申)

げにこうしん(孝心)の人と云はれん

無二膏や萬能膏の奇特より

親に孝行なにとつけても

孝行の人は高根の花なれや

見上げられたり誰もほめたり

子に迷ふ人の心を見るにつけ

我がかぞいろもかくやあるらん

親は膚君の御恩はからころも

かへすくも難有さかな

主に忠親には孝をなすものと

しらすることまことなりけれ

二親ふたたやに氣きをつけものゝ孝行かうこうは

すこし言葉ことばの鹽加減しほかげんせよ

四二 家庭かていに關くわんする俚歌りか

あい／＼と返事へんじよければ陸まじく

心こころに不足ふそくあれば不返事ふへんじ

わがうちは陸間敷むつまじくせよ氣きも涼すずし

あふがぬとても福ふくの神風かみかぜ

家内中かないぢゆうなかのよいのが神かみあそび

高天たかまヶ原はらに笑わらふ鈴すいの音ね

家内中かないぢゆうなかのよいのがたから船ぶね

こゝろやす／＼世よを渡わたるなり

船ぶねと水みづなかよくてこそ世よはわたれ

心こころのあらし浪風なみかぜぞうき

睦むつまじき夫婦ふうふうの中なかは千代八千代よよ

昔むかしも今いまも住吉すみよしの神かみ

松風まつかぜの聲こゑの中なかなる隠れ家かくやは

昔むかしも今いまも住吉すみよしの神かみ

よしあしと思おもふこゝろをふりすて

只何ただなんとなく住すめば住吉すみよし

金玉きんぎよくは寶たからにあらず善心ぜんしんを

つひ陰徳に子孫榮ふる

あいくの返事一つで天も日も

人の心もまるうなりけり

へだてなき能き友とても朝夕に

往來繁きはいとわれぞする

善悪の友によるべし氏よりも

育ちぞ麻にまじるよもぎも

人はたい身の程を知れ草の葉の

露もれもきは落つるものなり

世をわたる道はと問はいとにかくに

慾の淺瀬をゆけと答わん

慾深き淵に臨まば底もなし

淺き川瀬を渡るやすさよ

財寶を持ちくさらかす病より

一物もなき身こそやすけれ

盗人の用心なれば土藏より

ものを持たぬがいつち丈夫な

手も出さず頭も出さず尾も出さず

身を修めたる龜は萬年

何事も滿れば欠くる世の中の

月を我身の慎みにせよ
身の程を知れと教へし伊勢の神

今は薬屋の宮にまします

鳥でさへ其時々を知るものを

時に随ひ身の程を知れ

いづことてあはれならぬはなれども

あれたる宿を月はさやけき

あぢなもの徳は隠すにあらはるゝ

云ふてしまへばそれだけのもの

納涼も又冬ごもりあたゝめも

過ればやがて病ねこれり

ひゆるとて枕の方へ置火鉢

すき間の風は頭痛とぞなる

わきまへぬ老の長風呂汗たりて

風入りぬれば目口ひきつる

呑み薬たのみをかけて何事も

慎しまざれば其甲斐もなし

薬をばかねて手柄を見辨へ

それをしるしにたのむべきなり

炭薪米麥豆にいたるまで

賤山しづやまがつの汗あせと思おもへば

腹はらたてず家内かないなか中なかよくれごりなく

家職かしょく大切たいせつ實義じつぎ大切たいせつ

樂らくをせず酒色しうしよく財欲さいよくふかくせず

灸治きうぢ朝起あさたきたることを知しれ

うそ云いふな喧嘩けんくわ怪我けがすなやいとすへ

食しょくの用心ようじん手習てならひをせよ

もろくの病やまひの起たるその元もとは

家業かげう不精ふせうにれごり不和ふわがう合あ

行通ゆきかよふ牛うしの車くるまの音ねきけば

涙なみだと共に身みをぞ養やしなふ

食しょくはたいよく和やはらけて暖あたかに

たらはぬ程ほどは薬くすりにもます

まけてのく人ひとを弱よはしと思おもふなよ

智慧ちゐの力ちからの強つよきゆへなり

つよき木きは吹ふたれさるゝこともあり

よはき柳やなぎに風折かぜたれはなし

君きみをれきてあだし心こころをわがもたば

すねの松山まつやま浪なみもこねなん

色いろもなき心こころを人ひとに染そめしより

うつろはんとはれもほねなくに

形こそ深山かくれの朽木なれ

心は花になさばなりなん

いかばかり戀の山路のしげければ

いるとさりぬる道をわする

一聲もほととぎすより聞きたきは

誠のみちをかたる世の人

才覺と智慧にて渡る世なりせば

盗人は世の長者なるべし

相生のはじめのちざりかわらすは

幾千代までも住吉の松

さるといふ夫に鼻はいぬと云ふ

犬と猿との喧嘩なりけり

すなほなる竹の操を忘るゝな

うきふし繁き世を渡るとも

負て勝つ心にしれよ首引に

かちたる人の倒るゝを見て

賢さとやんごとなきを敬ひて

交はる友にまことあるべし

日に三度膳に向はれ父母や

主の御恩を深く味はへ

咲く花を歌によむ人ほむる人

さかせる花のもとを知れかし

地の御恩千萬無量ときく時は

あつしと云へどあらくふまれず

仰ぐべし我身の上のあつさより

君と親との恩のあつさを

身にかなふ業にて國に報はんと

心にかけてよ朝な夕なに

酒とてもよはぬ程にて愁ひ去る

心はのべて氣はかよふなり

あさみちて即ち臥さは腰いたみ

いかさま腹に癩聚出來ん

四三 處世に關する俚歌

植てみよ花の育たぬ里もなし

心からこそ身は賤しけれ

外からは手もさへられぬ要害を

人から内から破る栗のいがかな

勇氣とは我が食欲の私に

ちつとも負けす勝ちぬくを云ふ

天罰を恐れぬものを喩れば

つるぎをふんでねごとやせん
人はたゞ上に目がつく横にゆく

あしまの蟹のあさましの世や
ほうろくとれなじ火宅の人心

氣を入るもありほうずるもあり
うかくくと火宅の世話をやくうちに

つひ灰となる身とは知らずや
人にもものやれごもさのみへりもせず
これごもく貧な人あり

我れと云ふ迷ひの枝に咲きはこる

榮耀榮華のはては木枯し
慾ふかき人にみせばや餌について

つらるゝ魚の針の苦痛を
五々三の料理もかひたごと味憎も

さもち次第で味はかわらじ
説法に心の花は開けても

其實となれる人はまれなり
習ひつゝ見てこそ知るれ習はずに

善悪いふは愚かなりけり

我われをすて人ひとに物問ものこひ習ならふこそ

後のちは上手じょうずの基もとなりけり

其道そのみちに入いらんと思おもふ心こころこそ

我身わがみながらの師匠しやうなりけり

我が心こころみがきくて世よの中なか

鏡かがみとなりて人ひとに見みられよ

教をしなき人ひとこそ夏なつの火ひとり虫むし

慾よくの炎ほのに身みをこがすなり

慾深よくふかく物ものをほしがるれるかさ

身みさね我物わがものならぬ浮世うきよに

我われと云いふ心こころの鬼おにがつをのりなば

何なにとて福ふくは内うちに入いるべき

實みが入いると稻いねはうつむく人ひとの身みは

重おもふなるほどのしあがるなり

水みづの月取つきとらんとするか手長てなが猿ざる

はまつて居ゐるも知らぬ愚おろかさ

借切かりきりと思おもふ間まもなく目めが覺さめて

乗合船のりあひぶねの夜半よはのれきふし

愚おろかなる瞋恚しんいのほむらふきたて

我われと迎むかふる火ひの車くるまかな

朝なく木の葉野原に吹なして

我と嵐の音よばるなり

算用で二四が八つちり目をあいて

三々九らふをするが身の爲め

かりそめに人の苦しむ事をせば

家のほろぶる時と知るべし

行く末の榮へ思はい人の爲め

よからんことの數をつくせよ

十悪をならべてたいて詠れば

貪慾殿のせいの高さよ

米蒔いて米がはゆれば善は善

悪には悪が報ふとぞ知れ

四四 修養に關する俚歌

何事も三番叟が大事なり

大事をふめば喜びありや

手あやまちしやすきものは色と金

身用心せよこれぞこわもの

そもさんともじさんとの二つ途

ふみ迷ふなとにらむ眼の玉

釋迦孔子公儀のれきて火の用心

うちわすれなと夜半の拍子木
よくきけよ螢ほごなる煙草の火

油断をすれば早がねの聲
氣もつかず目にも見へねどいつの間に

ほごりのたまる袂なりけり
傀儡師むねにかけたる人形箱

佛出そうと鬼を出そうと
わがまゝに人の心の傀儡師

鬼かき出せは佛かくるゝ
世の人のいやがる事はいふなすな

わが身にかへりれもひくらべて
手や足のよごれは常にあらへごも

心の垢を洗ふ人なし
朝夕に顔と手足を洗ふなり

心の垢もすゝぐべきなり
鏡山人の志賀から崎見へて

我が身の上はかへりみす海
はらわたの洗濯しても又しても

生れついたり垢ぞ賤しき
谷川の流れにかけし丸木橋

世をわたる身は足元をみよ
人を見る目は有明の月なれや

我身の上はうば玉の闇
身代は坂に車をれす如し

油断をすれば下りこそすれ
勇むとも手綱するすな人間は

かの塞翁が萬事春駒
なきなぞ人には云ひて有ぬべし

心の問は如何答へん
盃に向へばうつる心かな

露うけじとは思ひしかども
色みわてうつらふものは世の中の

人の心の花にぞありける
昔したれ人の心を白糸の

染むれば染まる色になしなん
いざさらば思ひ立田の薄紅葉

人の心に秋の來ぬ間に
よしあしの人にはあらで我にあり

形直ふて影もまがらず
上りたり又落ぶるゝ物ぞ知り

釣瓶の水もむざと使ふな
さとりしと思ひし形の身に添ひて

ついに障子を離れざる人

油断こそ大敵なりと心得て

堅固に守れ己が心を

やみくもに登る心は有頂天

終に天竺浪人となる

人心あしき道には入りやすし

朱に交はりて赤耻をかく

柚人のいつぞやつけし斧のあと

松はそれより雪折れとなる

ちつくりと蟻の穴より水もりて

悪事千里の堤くづる

こそげてもあとからたまる鍋のすみ

命の薪あらん限りは

四五 勤儉に關する俚歌

苦にするな金は世上に預けたる

れしくばやろう働いて取れ

なせばなるなさねばならぬ何事も

成らぬと云ふは爲さなければなり

長命ちやうみやうはたい働はたらくに如しくはなし

流ながるゝ水みづのくさらぬを見みよ

上じやうく々もこれに及およはず我われ々が

働はたらいて食くふ飯めしのうまさよ

いこなみに家業かげうだいじ大事だいじにねこたらず

一いパイのんで寝ねるが極樂ごくらく

渡世ごせいをば正直しやうぢきにして精出せいだせよ

神かみの恵めぐみぞ行末ゆくすゑもよし

年としこしの鬼おには豆まめでもいにもしよう

大おほ三十日ほみそかのは豆まめでいぬまい

吉野川よしのがほ其水上そのみなかみを尋たづねば

むぐらの零萩しづくはぎの下露したつゆ

世よの中なかは何なんの糸瓜へちまとれもへごも

ぶらりとばかりしても居ゐられず

磨みがいたら磨みがいただけに光ひかるなり

何なにの玉たまでも性根玉しやうねだまでも

みな人の本ほんの心こころはます鏡かきみ

磨みがかばなごか曇くもりはつへき

両りやうの手てを遊あそばさぬこそ福ふくの神かみ

我わが食くふ分ぶんは足元あしもとにあり

なき物を仕出す寶の手を持ちて

たい置く人を愚かなりけり

まめにたい身を勤むれば福は内

鬼や貧乏は外へ逃げ行く

極樂はいつくの果と思ひしに

家業精出す正直の門

働いて金を儲けて藏たて

又働人雇ふ身となれ

ふめ鑛靴ふめくたふめ鑛靴

精さへ出せば金は沸きもの

苦もあれば又樂もありそれく

思ひくらべて家職せい出せ

朝臥せば何につけても徳はなし

病も起り用もかへせば

ねそくねて早く起るのれさくせを

しつけ習へよ一代の徳

貧乏の棒もかせげはれひかへす

ふりまわしよくなるも世の中

盗人の種とて外になきぞかし

家職怠る人のなるもの

それぐの家職をさらひ横事に

かしこき人は身を持たぬもの

我が槌は賣うち出す槌ならで

のらくらものゝ頭打つ槌

恐るべし色と酒とにねぼれては

末はうかばぬ借金の淵

つとめても又勤めても勤めても

勤めたらぬは勤めなりけり

怠らず勤めくよ眞實に

うられもてなく今日を大事に

足ることを尻からげして樂をせず

かせぐからだに福德はあり

世の人の心を打出の小槌かな

福を出そうと貧を出そうと

儉約の口傳と云ふは外になし

こらへ袋の紐のしめよう

金銀も貸せず使はず施さず

重ねてれば石も同然

金持と朝晩たまる灰吹は

たまる程尙きたなしと知れ

繁昌は家業精出し奢らぬが

けたの違はぬ早い算用

四六 堪忍に關する俚歌

かんにんは一つ二つで事足らす

一日中に千も二千も

喧嘩したあとの心の口惜しさ

堪忍せぬが残念にあら

たしなめよ短氣と云ふは足らぬゆへ

いりたる智恵に短氣なきもの

ゆく末は海となるべき山水も

しばし木の葉の下ぐいるなり

雨露にうたるればこそみぢばも

錦をかざる秋はありけり

向ふから邪劍をぬいてかゝることも

我が堪忍の鞘にれさめよ

わるい事たきつけられてにゆるのは

地獄の釜の湯とや云ふらん

堪忍を守るは出来ぬことぞかし

腹を立てねば入らぬ堪忍

人の股くぐりて耻ぢぬかしこさは

智者の鏡と今にはめられ
堪忍のなる堪忍が堪忍か

ならぬ堪忍するが堪忍
初春の徳は堪忍御萬歳

愛敬ありて榮へ目出度し
人に勝つ力はあれど兎に角に

我が身勝手に勝つ力なし
かけ出す心の駒をひきとむる

手綱となせよ堪忍の二字
いのしゝものいて通せば怪我をせず

怪我せぬ爲めに學ぶ學問
堪忍ときけば安きに似たれども

已れに勝つの替名なりけり
堪忍のじのあしたはひよりにて

心の闇もはるゝ雲さり
福德は爰にあるぞと大黒が

こらへ袋をきつとれさへる
踏まれても根つよくしのべ福壽草

やがて花咲く春を待ちけり
知足に關する俚歌

四七

足ることを知るにまかせて事たらず

足らで事たる身こそ安けれ

上みれば及ばぬ事の多かりき

笠きてくらせ已が心に

足ることを知る心こそ福の神

布袋の顔はいつもにこく

とやかくと思ふ心が火宅なり

思はねばこそこゝも住吉

足ることを知れば安樂世界にて

佛のかごに法の道筋

破れたる着物をきても足ることを

知ればついで錦なりけり

足ることを知る堪忍か正直の

正札附と五両けんあれ

四八 慎言に關する俚歌

三寸の舌で五尺の身體をば

養ひもする失ひもする

ねんごろになるも口ゆへよい中を

隔つる様にするも口ゆへ

一枚の舟の底よりねそろしき

二枚の舌で人を損ふ

れそるべき槍先よりも舌の先

わては我身をつさくすすなり

よき事は見聞てもいへあしきをば

見ざる聞かざる言はざるぞよき

禍の門口なれば油断なく

心の中の慎みをせよ

人のうへよしとも云ひて何かせん

いろへばにござる谷川の水

正直に關する俚歌

いふ事と身の行ひと違はずは

味噌も薪も其中にあり

天道に禍福定めた門はなし

たゞ其人の招く所ぞ

徳をあげ悪を罪する天道の

其さし引は水ももらさず

心さへ正直なればかたはでも

飯食ふ事に氣づかひはなし

よごれても鼠いろでも人は人

にござりにしまぬ蓮の白糸

商あきなひに忠ちゆうぎ義ぎ立たつればれのづから

且たんな那ながよふて子し孫そん繁はん昌じやう

しろものに龜そま末まつのなるを忠ちゆうと云いふ

高かうり利りとらぬを義ぎともいふなり

れこなひに口くちと心こころと違たがはずば

人ひとにみられて何なにか耻はぢなん

證しやうもん文ぶんと書かくがすなはち愚ぐ痴ちの種たね

實じつの得意とくいに何なにの證しやうもん文ぶん

身みを輕かるく心こころすなほに持もつ人ひとは

あぶなそうでもあぶなげもなし

商あきなひの元もと手てといふは買かひ先さきを

親おやの如ごとくに厚あつくしたしめ

商あきなひのじやうす上う手すと云いふは賣うり先さきを

主しゆと思おもふて誠まことつくせよ

すなほなる人ひとの心こころのりの船ふね

わたる浮うき世よに浪なみ風かぜもなし

直すぐなれば重おも荷にをかけて折たぬなり

世よ渡わたる人ひとの息いき杖つゑとせよ

いつわりのかざり着きせず人ひとはたい

生うまれのまゝの裸はだかこそよき

花を見る道のほとりの古狐

かりの色にや人迷ふらん

五〇 人生に關する俚歌

ねいるとも心しづめてねいれかし

其儘死ぬることもありけり

昨日みし人はと問へば今日はなし

明日亦たれか我を問ふらん

世の中に一人といまるものあらば

もしわれかわと身をやたのまん

明日よりはあだに心をもつまじと

思ひし今日もあだにくらしつ

なさけには野邊までこそは送れども

土の下まで問ふ人もなし

夢の世を長き未來にれもひかへ

慾知り顔の慾しらすかな

往生は大事のこのやすきなり

やすく思へば大事なりけり

年よりてうれしきものは水鏡

見る度毎に此世いとへば

へり下り神儒佛をば尊みて

よろづに誠まことよろづ堪忍かんにん
心こころだに誠まことの道みちにかなひなば

祈いのらすとても神かみや守まもらん

いのりてもしるしなきこそしるしなれ

思おもへたい満みづれはやがて欠かく月つきの

あはれや虚空こくうを家いへと住すなして
十六夜いざよひの空そらや人ひとの世よの中なか

心こころにかゝるぞうさくもなし

いづるとも入いるとも月つきを思おもはねば

心こころにかゝる山やまの端はもなし

今いまははや後世ごせの勤つとめもせざりけり

あうんの二字にじのあるにまかせて

かりの世よにまた旅たびねして草枕くさまくら

夢ゆめの浮世うきよにまた夢ゆめを見る

とやかくとたくみし桶おけの底そこぬけて

水みづたまらねば月つきも宿やせらす

ねてもゆめ来きても夢ゆめの世よの中なかを

夢ゆめと知らねば夢ゆめとさめけり

心得こころえし道みちにつかへばつかふ人の

あやまる事のつねになきなり
世の事はふくべの尻になまづの尾

れすが如くにわたるべきなり
心をはつかふことなく休め置き

身をはひまなく遣ふべきなり
世の中はむばらの中のかぎわらひ

むづかしけれぞればねらるゝ
何事も思へば安き世の中を

心となげくわが身なりけり
下みれば我にまさりし人もなし

笠とりて見よ空の高さを
さしあたる今日の事のみ思へた

かへらぬきのふ知らぬあすの日
世の人の心ひろかれ天が下

いしと豆腐も時のなれやい
氣は長く勤は堅く色うすく

食細くして心廣かれ
うき事も知らず千歳を経る田鶴の

清き心にならへ世の人

感 話

一 石黒忠憲男の品行方正

功成り名遂げて自ら圓滿辭職居士と名乗れる石黒忠憲男は品行方正なる紳士であるが、元日には、朝拜と皇族方への御年禮をすませると、一室に引込んで誰にもあわぬ、何故かと云ふと此日は男が遺言を書くのだと云ふことだ、元日に遺言とは妙な様だが、人は老少不定で何時いかなることがあるかもしれない、殊に身は軍職を帯て居て、事あるの日には、何時でも從軍の任

を負ふてれるから、遺族が跡仕末にこまらぬ様にと云ふので、身後一切の始末は、年々元日に一室に閉居して、最も静かな處で、虚心平氣になりて認めて、これは密封して誰にも決して示せぬのであるそうだ、この一事に徴しても平生の心懸けの程が能くわかる、

或時、女子教育會の席上で演説して「自分は平生から婦人と云ふものには、僅かに二人にしか可愛がられぬものである」と云ふと、演説がすんでから、或人が「可愛がりた婦人の一人は奥様でせうが、モ一人は誰でありますか」と尋ねると、「これは母である」と云ふて大笑をさせたそうである、

二 松陰先生の獄中講話

松陰先生が入獄の時、孟子の講義をせられた如きは、吾人の最も欽仰すべき所である、明日にも殺さるゝか知れなる時にも道を講じて少しも息まなる、君子たるもの斯くなくてはならぬ或人が先生に對して、私共は命且夕に逼りてれる、孟子の講義を聞くも何の所詮もなると申した所が、先生の云はるゝには孟子を講ずるのは章句の末に走つて文字を研究するのではない道の研究の爲めである、道なくして一日も生存することは出来ぬ、一日生存すれば一日だけの道を守らねばならぬと云つて、全く生死を念頭にれかれなかつたと云ふことである、かくあり

てこそ始めて天地の道に適ふことが出来るのである、

三 柳亭種彦と俳句

予一日戯作者略傳を讀み柳亭種彦の傳に及ぶ、種彦は幼時疝氣強く兎角腹立ち易き惡僻ありしが、其父之を誡めんとして、風に天窗はられて眠る柳哉

の一句を示されたれば、種彦之を讀みて大に感じ、爾來深く戒慎し、己れの號を初めは柳の風成、後には柳亭と定め遂に戯作者となりて一家をなすに至れりと云ふ、人は折に觸れ機に臨みて自ら大に感じ、奮然志を立て、功名をなすものにして、此話の如きは大に青年の訓誡となすに足る、

四 土屋東雨の名言

土屋東雨と云ふは名高き彫刻師でありた常に弟子を戒めて言はるゝに「職人と云ふものは、金を得やうと思ふ心がありてはならぬ、少しでもそんな氣があつては、出來た物に銅臭を帶るたゞよくしやうと云ふことをのみ心掛よ」とある、

音に職人のみならず、政治家にも宗教家にも教育家にも、此話を應用して反省を促したい、

五 作兵衛餓死して麥種を殘す

昔、伊豫の宇和島に大飢饉のありた事がありました、田は枯れはてゝ一粒の産もなく、野には青葉の影もなぬ、昨日は幾人

の餓死、今日は何人を見るも涙の有様でありました、其時に作兵衛と云ふ農夫は、一升入りの麥の袋を枕にして餓死に苦しんでおりました、或人が怪んで「汝がそう餓死に苦しむなら、何故其枕にしてゐる麥を食はぬのか」と云ひますると、「これは食はうと思はぬではなるが、今年の大飢饉、此宇和島領分には一粒の米もなく一粒の麥もなる、このまゝに過ぎなは來年は持つべき種がなるであろう、それでは來年も亦困らねばならぬのであるから、些少ではあるが、わしが枕にしてゐる一升入りの麥、これだけでも残してれば、來年の種がつきぬであろう、今私がいかに食ふたとして、一月とも生命を保つことが出来ぬ、私はよ

しこゝで死んで仕舞ても、此種だけは残して置きたい」と苦しみ息をつぎながら話を致しましたが、作兵衛は遂に其麥を枕にしたまゝ死んでしまいました、それで宇和島領には翌年の種が絶無にもなりませんと云ふことであります、此作兵衛の心懸こそ、佛菩薩の心懸とも申すべき、立派なものではありませんか、

六 南條博士と笠原氏との友誼

南條博士、笠原研壽氏と共に梵學を英のマクスミエラ博士に學ぶ、二人の情交密々兄弟も齒ならず、一旦笠原氏の病を得て歸るや、郵筒織るが如く、其笠原氏より南條博士にねくりたる

ものを見ても、二人が如何に相信じ相許せしかを徴すべし、笠原氏歿して已に十數年、南條博士今尙其肖像を懷口にし、忌辰の來る毎に讀經法要相吊せざるなし、而して人に逢ふ毎に笠原氏を推重してれかす、人情紙よりも薄きの今日、南條博士の如きは蓋し尠し、

七 貝原益軒先生の和樂

貝原益軒先生は、和樂を尙び常に氣を平にして敢て怒らず、憂悶を避けて能く樂むことを知れり、曾て牡丹を愛し、數種を園中に植ゑたり、

一日、塾生隣家の若者と園内に角力して、其愛する所の牡丹を折りければ、塾生は先生の怒りにあわんことを恐れて、隣家の主人につきて罪を謝しけるに、益軒曰く、予が牡丹を植ゑたるは、樂まんが爲めなり、怒らんが爲にあらすこと、遂に咎めざりしと、

八 レギユラス約を重んず

昔、羅馬とカルセーシとが戰ふた事がある、其時羅馬の將官のレギユラスと云ふ人が將に殺されんとしましたが、斷頭臺へ上ても少しも色が變せぬので、カルセーシの大將も之に感じて使命をレギユラスに與ゑて云ひますには、汝これより本國羅馬にかへり我が言ふ所を彼に告げよ、我が言ふ所用いらるれば汝

の生命は之を助けん、もし我言用いられずんば、汝復再びこゝに來れ以て汝を刑せんと、レギユラスは諾して羅馬に還り、これを羅馬の將士に云ひましたが、誰も其言を用ゐませぬ、そこで止むなくレギユラスは、再びカルセイジに趣うと致しますので、羅馬の將士は之を止めて、汝已に故國にかへる何の好む所ありてカルセイジに行かんとする、カルセイジにゆかば汝は殺されん、愚も亦甚しからずやと、レギユラス、慨然として曰く、愚か愚ならざるかは我れこれを知らず、殺すか殺さるかも我れこれを知らず、我は只約を踐んで趣くのみと、終にカルセイジにゆき刑に處せられたりと、男兒約を守る斯の如くに

してこそ眞の武士道と云ふことが出来るのであります、

九 孟敏破甑を顧みず

後漢の孟敏は、甑を荷ふて之を地に落したるが、顧みもせずして去りた、そこで郭林宗が其意を問ふと、孟敏の云ふ、甑は已に破れぬ、之を見るも何の益あらんと、實に然り、破れたる甑は再び拾ふてみても何の益もなる、然るに未練なる人は、かけたる陶器の破片を合せて、幾度か口惜涙をそぐ者が多い、大丈夫の世に處するは、孟敏の破甑を顧みざるの意氣を要するので、これ亦静を守るの一法である、

一〇 大石良雄の實業奨励

大石良雄、復讐の後、肥後邸に幽せられ、死を賜ふ前夜、肥後の藩士安場某、良雄に告げて申しまするに、裁決將に近きにあらんとすることを聞きましたたが、若し承りておくべきことあらば、何なりとも御告げ下され、良雄曰く、予は元より一死を分としてたりますから別に云ふべき事もありませぬが、只一事子に話してれきたいことがある、ソハ外でもありませんが、私が數年前に薩摩の國にゆきましたたが、其地に多く烏柏の木を植ゆるを見ました、烏柏の木は實を蠟として國益を助くべきものとききましたたが、私は其苗を買ふて我地方に移植しようと思ふて果すことを得ませなんだ、肥後は薩摩とは隣國で、氣

候土質も相同じいでせうから必ず生長するであらう、後日之を試みては如何ですかと云はれた、安場氏其言を記憶し、良雄の死後に至りて此事を試みようと思ひ、遂に其苗を薩摩より取よせて之を其隙地に植るましたたが、果して能く成長して、蠟の利益を多分に收むることを得ましたと云ふことである、良雄復讐の一事は、忠孝の大節に關し綱常を維持するの大功あり、而して此人の心を殖産興業の事に留めたることは、最も稱讚すべきことである、

一 伊達政宗と直江山城守

伊達政宗、江戸城に於て、諸大名より集まり、四方山の話の

因みに、イト自慢そうに外國交通の事を語り、徐々^{たもむ}に外國金貨を取り出し、甲より乙と順次に回覧をさせた何かな當時^{たうじ}にありては珍貴な品であるから、一同の感賞斜めならず、到頭上杉氏の椽側^{えんがは}（位次の名）なる直江山城守にまで回^{まは}りて來た、すると山城守は扇子の上に受取りて見た、所が傍^{そば}なる或大名が、ナニ遠慮には及ばぬ、よく手に取りて見られよ、とありしに、山城守は儼然として「采配を持つ手で御座る」と答へた、すると政宗はすかさず、「左様か、我手は戦場で采配をも取り、雪隠で糞も拭く手であるぞ」と喝破せられたと云ふことである、山城守の様に采配を執るのみては、擔板漢の嘲りを免れぬ、采配も取り、

糞をも拭くの自由は何事にも必要である、流星は政宗ほどありて、其云ふ所、大に禪味を帯びてれる、

一二 山岡鐵舟先生の宇宙解

山岡鐵舟先生は「宇宙解」と云ふものを書いてねらるゝ、其中に宇宙は一枚のもので、天子も官吏も平民も、皆宇宙の一部であるとして、さて其次ぎに自分の名を書いて、山岡も宇宙の一部であるとしてある、これは至極面白きことである、我は宇宙の一部分である、否我は即ち宇宙である、我即ち宇宙である以上は、我は宇宙の眞理を發揮せねばならぬ、宇宙の公道を守らねばならぬ、かゝる見地に住して行動せらるゝから、一舉一

動が實に公明正大である、嘗て山岡先生へ位階を與へんと云ふ御沙汰がありた時、先生は斷然之を斷はられた、自分には功勞と云ふものは少しもなる、自分は自分の盡すだけのつとめを盡したまふであると申された、これは儒教の上から發揮せられた思想である、日常の倫理行動が宇宙の眞理を離れてはならぬと云ふのであるから、陰日向なしに樂に愉快に道を行ふことが出来るのである、

一三 林羅山の除日開講

林羅山の門人管得庵、歳暮に羅山の家に至り謂て曰く、予未だ通鑑綱目を讀まず、先生來春を以て予が爲めに講せられよと

羅山曰く、子が心誠に綱目を讀まんとならば、何ぞ來年を待たんとやと、即ち除日を以て開講をなせりとぞ、

一四 ダイオゼニスの寡欲

亞歷山弗大王は世界に名を轟かした大勢力家でありまして、如何なる帝王までも頭をさげてゆかなるものはなかりたが、ダイオゼニスばかりはごうしても拜謁に來なる、仕方がなぬから大王がわざわざ御臨幸になりました、ダイオゼニスは家もなぬ人で酒屋から大きな酒樽をもらつて來て、雨がふると酒樽の中へ這入りてれる、雨が降らずばごろ／＼としてれる乞食同様である、所が學識と云ふたら非常なもので、天然自然の宇宙の道

理を樂んで居る。大王が御臨幸になりた時に、夏日の照る處で脊中あぶりをして居りて、振かへりて見もしない、據なく大王は鼻の先へ行つて、「我はこの國の王である、先生の御高名をきいて態々御目にかゝりに参りた、何か御望みがあるなら相談しよう」と云ふ詔がありた、ダイオゼニス曰く、「ごの様な願でも御聞濟下さいますか」王、「何でも聞く言はツしやれ」ダイオゼニス「それでは申しますが折角私の背中灸りをして居る處が日陰になりてしもうた、そこのけて下さい、此外には何も願はなる」と云ふた、これには世界の英雄たる亞歴山弗大王も困りた、所謂「富貴も淫する能はず威武も屈する能はず」とはこれ

らのことを云ふたのであろう、

一五 山鹿素行と赤穂藩

山鹿甚五左衛門素行と云ふは、道學は林道春の門に學ひ、又一派の兵學山鹿流と云ふを立てた大豪傑である、門人の多きこと數千人の上にも上り、儼然たる一諸侯の如き有様でありたで、幕府の爲めに忌まれて播州に預けられた、其頃の淺野侯は大に素行を重んじて自ら兵學の弟子となり、一藩の教育を囑托せられました、そこで素行も非常に感激して、つね々申しまするには、

我は斯の如く一生涯幽囚の身であるから、とても生命のあ

る中には淺野侯の御高誼に酬ゆることも出来まいが、平生に心を盡して一藩の子弟に鍛へたから、赤穂藩もし不幸にして大事到来した曉には、澤山なる山鹿甚五左衛門があらはれて出るであろうぞ、其時こそは、始めて御高誼に酬ゆることが出来る、

と云ひましたが、素行が死んでから、彼の變が起りて、素行の高弟とも申すべき、原總右衛門元辰、大石内藏之助良雄、磯貝十介などがありて、また亡君の志を成し、一日の恩やたちまちどくる厚氷一名を天下に輝して、武士道を萬代に扶植いたしました、

一六 新島襄氏の熱誠

編者曾て道友某兄に聞く、新島襄同志社に校長たりし時、生徒數名兩級合併の事より不平の餘り、同盟退校せんとするや、先生徐ろに説て曰く、嗚呼この慘澹たる見る影もなき日本國をじて花笑ひ鳥歌ふの日本國たらしむべき重任を負へる者は實に諸君なり、予諸君の前途を思ふ毎に愛せざらんと欲するも得べけんや、然るに今や此敬愛すべき諸君をして、此事あるに至らしむ、是れ全く生徒諸君の罪にあらず、又教員諸君の罪にもあらず、唯これ裏の罪あるのみ、裏の不徳之を爲さしむるのみ、聲淚俱に落ち、携ふる所の杖を以て、自ら左手を答つこと數回

杖爲めに三折し、左手爲めに紫色を呈して大に腫る、教員生徒之を見て大に感動し、爾後復た不平を唱ふるものなしと、

一七 ビスマーク公の歎聲

鐵血相公ビスマークと云へば、世界三傑の一である云ふことは、小學校の生徒も知りておられますが、其ビスマークは、身匹夫より起りて、ウイールヘルム老帝を佐けまいらせ、獨逸聯邦を統一して、雷名を天下に轟かし、功勳業れさく、飛ぶ鳥も墜さんばかりでありましたが、一日、公が人に向ふて云はるゝには、世には我を幸福満ち、何不足なき身の様に思ひなせる人もあるとのことであるが、ソハ情けなき推量である、まこと

我心に愉快なりと思ひしは、初めて兎狩りに行た時ばかりでありた、八十歳の長の年月、勞苦の中にすぎ去り、あはれ幸福のなきは我身の上であると、歎息せられたと云ふことである、

一八 島津公の嚴肅

島津公は、朝は六時に起き夜は十時に休まるゝが定まりて居りたそうで、其間羽織袴で姿勢正しく、嚴然として端座して、少しも座を崩さるゝことはなかりた、御側近くれる女共でも、夜の十時を過ぐるまでは決して近くことが出来なかりた、只掃除のみ御側に近くことが出来た、彼の西郷南洲が公に知らるゝ様になりたのは、この掃除人となりて這入りこんで、遂に勤

王の御話を致した爲めであると申すことである、公が此の如く
嚴肅に身を處せられたのは、全く天地に對する畏敬の念から發
して、斯くせられたのである、

一九 伯瑜の孝行

支那に伯瑜と云ふ孝行人がありた、處が或日、何か思はず不
調法なる事を仕たによりて、其母が彼を答うちましたら泣いた
そこで母の曰ふには、今迄は汝を答うつても、まだ一度も泣い
たことはなぬに、今日に限りて泣いたは何故ぞと問ふたら、答
ふる様には、今迄は罪を得て答うたれます度毎に痛う御座りま
した、然るに今日は痛う御座りませぬから、それだけ彼方が御

年を召されて、氣力が衰る遊ばしたかと思へば、悲う御座りま
すので泣きましたと申したと云ふ話が、「說苑」と云ふ書物に出
てある、世間尋常の人々の、打たれて泣くのは痛いからである
に、伯瑜の泣くは夫と反對で痛うなるからである

二〇 能登頓成と地獄の釜

能登の頓成は大谷派の學者にして、異安心を以て其名高し、
或時、松平美濃守安心調の序、頓成に問ふて曰く、地獄の釜は
何人の作なるか、頓成聲に應じて曰く、彼の支那の二十四孝中
で有名なる郭巨が堀り出せし黄金の釜と同作なりと、美濃守茫
然として答ふる所を知らず、

二一 ソクラテスの堪忍

希臘の大賢人にソクラテスと云ふ人がありました、此人は堪忍を以て自身の本尊と致した程の人で、然るに其妻君は、なか／＼の癩癩者で、少しの事にも腹を立て怒り出す人でして、或時も僅かな事で大變れこり、夫に向ふて悪口を云ひましても、ソクラテスは少しもかまわず、書物を読んでられますから、益々怒つて後には桶に水を一杯入れまして、其水を夫の頭からざんぶりあふせかけました、それに夫のソクラテスは笑ひながら、雷が鳴り出すと雨が降るものぢやと云はれたそうであります、實に感心なことではありませんか、

二三 一茶の飄逸無欲

加州公、或時柏原に來りし時、一茶を召せども應せず、乃ち侍臣をして金梨地の蔭繪の箱に入れたる美麗なる書畫帖に俳句を索めけるに、一茶辭して筆を執らず、強て乞はるゝ儘、缺け損じたる硯の埃を打ち拂ひ、唾液を以て墨をすり、子供等がのゝ様といふ梅の花と書す、使臣其亡狀を憤りけれど、己むを得ず主人に復命せしに、加州公興悦斜めならず、報酬として黄金十兩を贈らしむ一茶戸を閉ぢて之を受けず、強いて贈らんとするに、然らば三分だけを申し受けんとて、餘は皆返戻したり、

其後加州侯、紫檀の硯箱に美事なる硯を入れて、一茶に贈られたるに、人々珍品なりとて來り觀る者多く、殊に骨董商某は垂涎して止まず、一茶、觀る者多くて煩はしきを以て、之を某に附與し、某は之を江戸に賣りて數百金を得たりと云ふ、這はあまりに飄逸無欲に過ぎたるが如し、然れども錙銖の利に齷齪して、仁義を忘れ人情を蔑にして耻を知らざる當世氣質に比すれば、雪と墨の相違あるを知るべし、

二三 末利夫人の頓智

波斯匿王、或時遊獵より歸り玉ふて、晚餐の準備間に合はざりしを見て大に怒り、厨人に斬罪を申しつけられました、末利

夫人之をきゝて大に驚き、官女に命じて美酒と佳肴とを用意せしめ、大王の許に至りて、美酒佳肴をすゝめ、官女をして歌ひ且つ舞はしめた、大王は大に喜ばれましたが、夫人は黃門に命じて、先の厨人の斬罪に處するを赦し玉ふた、翌日王は厨人を殺したりと思ひ、後悔せられました、末利夫人の計ひにて厨人の助かり居ることをきいて、王は大に御喜びなされた、後、末利夫人は、五戒の中、飲酒と妄語の二戒を犯せりと釋尊に懺悔し玉へば、釋尊は「それは大功德なり、惡中の善なり」と御答なされたとある、これは「摩訶止觀」の中に出てたる因縁である、

二四 三輪執齋先生弟子某の修養の徳

三輪執齋先生の弟子に非常に學問がありて、加ふるに修養の高かりた人がありた、此人は非常に貧乏でありた處からして、徳のある人をかゝる不幸に陥らしむるは氣の毒であること、世間の人が皆其不運を哀んだ、或時、一人の富豪が、ド一カしてあの人に金を恵んでやりたいと思ふたが、いきなりに金を恵んでも、ア一ユ一堅い人だから受取らなぬにきまつて居る、そこで金を貸すと云ふことにして與へようと思つて決心して其人を訪ふた、さぞかし困りてゐるであろうと思ふて行てみると、案外にも先生には泰然自若として、ド一モ何とも云ひ様のなる有様で、あ

なたは難儀でしたでしょう金が御入用なら貸しませうとはどうしても口をきることが出来なかりた、後日又行てみたが、遂に又御金の話をする機會がなかりた、三度目に伺ふたが又其儘に引かへした、後、執齋先生に逢つて其話をした所が、あの人は貴方が何度御出になりても金を貸しませうと云ふべき機會は恐くはありますまいと云はれたそうである、之れ此の天地の味を眞に味ふて獨り樂みたる人である、修養も茲に至らなければ大丈夫とは云へなぬ、

二五 弓の名人妙所を悟る

伊豫の宇和島藩に弓の名人がありた、其人の弟子に十分に出

来る人きがありたが、まだ一と息いきと云ふ處ところがドモ工合ぐあひがわるい
そこで許ゆるさず、これは自得じとくさすより外ほかはなるこ、其人そのひとが或る雪ゆき
の朝あさに弟子でしを招まねいて、色々いろく弓ゆみの話はなしをして居たが、其時そのとき庭前ていぜんの竹たけ
が雪ゆきの重おもりで曲まがりて居たが、雪ゆきがとけてピチンと刎はねかへりた
弟子でしは其竹そのたけの刎はねかへるのを見て、ハタト横手よこてを打うつて弓ゆみの妙みやう
所しよを悟さとつたと云ふことぢや、劔術けんじゆつにしても柔術にふじゆつにしても、名人めいじん
上手じやうずと云はれるものは、皆みなこの妙所みやうしよを悟さとらねばならぬのである
これは心こころを以もつて心こころに傳つたへるより外ほかはなるのです、

二六 アリスチツポスの直言ちやくげん

哲學てつがくの一派はにシリシシリシ學派がくはと云ふがあります、其首唱者そのしゆしやうしやアリス

チツポスと云ふ人は磊落らいらくなる君子くんしでありましたが、曾かつてシラキ
ユースのダイニシオス王わうに仕つかへて居たりました時とき、大藏大臣なほくらたいじんとも
云ふべき王わうの出納すいだうを司つかさどりてれるシノスと云ふ人と交まじはりまし
たが、其そのシノスと云ふ人は、身みは富裕ふゆなれども非常ひじやうなる客裔家りんしよくか
にして取とるに足たらざる人ひとでありました、一日あるひ、此人このひとの案内あんないにて
其邸宅そのていたくを觀覽くわんらんしましたが、其時そのときアリスチツポス氏は、盛さかんに客室きやくしつ
庭園ていげんの美びを賞しょうしてねりましたが、突然とつぜん主人しゆじんシノス氏の面上めんじやうに唾つば
をはきかけました、而しかしてしかも落付たちつきたる態度たいどにて左さの如ごとく云
はれました、「ごうを御免ごめん下され、到いたる處ところあまり御奇麗ごきれいでござい
まして、貴方あなたの面上めんじやうより外ほかに唾つばをはくべき適當てきたうの場所はしよを見出みだし

ませんでしたから、はからず御無禮いたしました」と、これはシ
ノス氏の吝嗇を短刀直入的に誡めたのであります。

二七 初鹿野傳左衛門の帳簿

徳川氏の旗下に、初鹿野傳左衛門と云ふ人が目付の役をつと
めた、此役は諸官吏の理非曲直を監察する職務である、處が
此傳左衛門は、仕官の初めより、一冊の帳簿を懐口へ入れねさ
人に逢へば其帳簿を出して何事をか之に記録し、又人の對話中
にも、幾度となく帳簿に記録するものゆへ、人々よく之を恐れ
て、自ら品行も正して、職務に私曲あらざれば、傳左衛門奉職
中には、官吏の犯罪者甚だ少く、幕府之を感賞して、官位を進

められたるが、死に臨み、生涯記録せし帳簿數百冊を封緘し、
之を幕府の親展閱覽に献じ、閱覽終らば、之を香花院に送るべ
しと遺言せしかば、其詞の如く之を幕府に献し、開封閱覽せら
れしに、數百冊の帳簿、徹頭徹尾、たゞ南無阿彌陀佛々々々々
と細書せしのみにて、他事は一字をも記載せしを見ざりしかば
幕府は更なり、滿城の諸官吏、皆其奇事に驚き、且つ其徳化に
服したりとぞ、

二八 鳥尾子爵の遺言

鳥尾子爵の葬儀は築地本願寺に於て執行し、本願寺連枝聽誓
院大谷尊資師、法主代理として導師たりしが、元來子爵は禪宗

の信者として社會一般に知られたる所なりしに、葬儀を本願寺にて行ひしは、病中の遺言に、我は禪味を知りたれども、我が家内は到底自力門にては悟道に入ること能はず、必ず念佛宗即ち眞宗によりて、來世得脱の用意を致すべし、依て我が葬儀は築地本願寺へ依頼すべし、さすれば本願寺に因縁を結び、遂に念佛門に入るの動機となるべしとの言ありたるに付き、嗣子鳥尾光氏は其遺志を繼ぎて築地本願寺にて執行せしなりと、亦近代の佳話と云ふべきことにこそ、

二九 新門辰五郎觀音を信仰す

新門辰五郎と云へば近代の俠客で、維新の際には随分働いた

男である、此男は常に他人に何と云はれても少しも顧みず、深く觀世音菩薩を信じて、それの心は觀音様が知りてござると云ふて居りたと云ふことである、無學な辰五郎であるが、此金剛不壞の信仰こそ、彼をして水火をも辭せず、能く弱を扶け強を挫きて、義の爲めに活動せしめた所以である、

三〇 古河老川の信念

私共が精神上の兄とも思ひて深く尊敬を拂つて居ました人に、古河老川と云ふ人がありた、此人は帝國大學を卒業して、其後絶えず佛教の爲めに力を盡された人であるが、明治三十二年の末に、二十九歳を一期として、郷里紀州和歌山の病院で亡

くなられました、

其亡そのなくなられる四五日前にちまへに、看護かんごして居ゐらるゝ兄上あにうへの手を取とりて云いはるゝには、「長い間あひだの病氣びやうきでありまするに、皆様みなさまが御見おたみ捨すもなく御親切ごしんせつにして下くだされて、是程難有これほどありがたい事ことはござりませぬ就つひては私わたくしの覺悟かくごの程ほどを一言聞ことばきいて下くだされ、病びは院長いんちやうに任まかせてややすく、身みは兄上あにうへにまかせてややすく、靈魂れいこんは願力がんりきの不思議ふしぎに任まかせてややすしと決心けつしんいたしましたして、今いまは只細々ただほそくに念佛ねんぶつして死期しごの至いたるのを待まちてねります」と、予よはこの信念しんねんの堅固けんこなるを聞きて、隨喜ずいきの涙なみだにむせぶ次第しだいである、

三一 大和清九郎の懺悔

大和やまとの清九郎せいきゅうらうと云いふは眞宗信者しんしゅうしんじやの模範もはんとも云いふべき篤信者とくしんじやでありた、或人あるひとが一つ試こころみてやろうと思おもふて、清九郎せいきゅうらうが大谷本廟おほたにほんべうを參詣さんげいの際さいに、財布さいふに金かねを入れて御堂みだうの前に置まき、木蔭こかげに隠かくれて其舉動そのふるまひを見てねりた、清九郎せいきゅうらうは本堂ほんだうよりねりて履物はきものをはこうとしてフト其財布そのさいふに目めがついた、ソツト拾ひらふて懐ふとこへ入いれてかへりかけた、今いまの人ひとはこれを見みてさては、信者しんじやと云いへども淺間あさま布ぬいものであると思おもひつゝ見みて居ゐると、清九郎せいきゅうらうは門かどまでゆいたが直すにあとへかけ戻かへり今いまの財布さいふを懐ふとこより出だして、元もとの場所ばしよにたき、御本尊ごほんぞんを遙拜やうはいして曰いはく、

ア、難有ありがたう御座ござります、拾ひふて懐ふとこへ入いれたはこの清九郎せいきゅうらう

出させてもろうたは如來様の御慈悲でござる、南無阿彌陀佛々々々々、

と念佛をとなへながら、しづく下向されたとある、活ける懺悔とはこれらを云ふのであろう、

三三 餅屋市五郎その女房を化す

播州に餅屋市五郎と云ふ、専修念佛の行者がありまして、此人の女房は邪見な者でありましたが、それを不愆がりて、美食のある時は先づ女房に興へ、又仕事も苦勞なることは、手代りして客の如くもてなしますゆへ、或人、市五郎に其故を問ひますと、「彼に後生の一大事を毎々勧めますれど、無宿善と見えて

聊かも聞く心もなければ、夫が不愆なゆへ、せめて此世でなりども、樂がさせたい」と答へましたと聞き、流石邪見の女房も其實意に感じて、終に御法義に入り、夫婦もろども、御恩を喜びました、

三三 佐吉の樂み

美濃の國竹鼻村に、佐吉と云ふ佛教信者がありた、此人は平生よく勉強して、儉約な暮らしをなし、少しも奢り貪るなごのことがなかりた、或人、佐吉に問て云ふ様、人には皆多少の樂みありて、家業の勞れを慰めるものである、汝の樂みは何であるかと、佐吉之に答へて、余には多くの樂みがある、其内、佛前

てねります、そのうち其中から細々ながら如來様の御慈悲を喜んで
 ります、わたくし私は一生涯にうれしい事が二度御座りました、其一
 は、二十歳ばかりの頃、伊勢參宮を致しましたが、年は若し身
 體は元氣なり、頭には管笠をかぶり、身には蓑を着て、伊勢は
 津で持つ津は伊勢で持つと、伊勢音頭をしながら東海道を歩ん
 だ時には、實にねごり上る程の樂みでありました、今は年老い
 て何の樂みもなき様なれども、如來様の御慈悲を信じさせても
 らいまして、頭には王法爲本の笠をかぶり、身體には仁義道德
 の蓑を着て、御恩尊とや南無阿彌陀佛、御慈悲うれしや南無阿
 彌陀佛と、佛恩報謝の稱名相續して、御淨土まいりの道中させ

てもらうが今日の日暮しである、これ其二で御座ります」と申
 陳られたとある、

三六 三左衛門の厚信

三左衛門は伊賀西條村の油屋であります、常に帳簿に向ふて
 勘定するのにならず、稱名をとなへますゆへたりく勘定が
 ちがひ、又つけ落しも出来る、それ故妻が「すこし心し玉へ損
 失も少からねば」と申した處、「この世のわづかなことをさへ、
 忘れまいとて帳簿に記すでなるか、永劫の大事を引き受け玉ふ
 如來の御恩をどうして忘ることかできやう」と答へましたゆ
 へ、妻も夫の信念のあまり厚いのに深く耻ら入りました

此三左衛門が時々妻に向ふて申すには、「互に罪の身の上なれば、いつ何時兩人の間に争ひを起すやもしれぬが、其時には是非を云はず、さきに御名を唱へた者が勝となることにせやう」と申してれりましたそうである、

三七 英國の軍艦ヴィクトリア號の沈没

英國のヴィクトリア號といふ軍艦が沈没する時に、船は半ば傾きて怒濤は艦上に入りこむでれるのに、火薬番はチャンと火薬庫の前に立つて、少しも體度を亂さず、武器を磨くものは、チャンと其所を亂れず磨いてれつて、今沈没して生命を捨てねばならぬと云ふことを知らぬ様である、艦長はこれを巡視して

「英吉利の海軍の強いのは戦争のかけひきが上手なばかりではなる、船員が死ぬまで其職を守りて、少しも騒がぬのにあるのぢや」と云はれたと云ふことであります、今船が沈没すると云ふに少しも騒がず、泰然自若として其職を盡くしてれるのは、何たる大膽、何たる勇氣でござりませう、

三八 某小學校教員の實驗談

編者の村内に居る小學校教員某君が面白い事を話されましたそれは其教員が或時の事に作文をさせましたそうですが、小學校の事ですから、題は無論易いのでありまして、其時の題は「烟管」と云ふのでありた、此れは兒童が平生見聞してれりまする

から、大抵出来たやうですが、其文が種々で、或は「烟管は竹と金とでこしらへたもので、れ父さんが烟草を吸ふのである」とか、或は「れ父さんの腰につけてゆくもので、竹と鐵とでこしらへてある」とか書いたので、小學校の二年生や三年生では可なりの成績である、所が中に一人の生徒が烟管は金と竹にて造り、れ父さんがれ母さんをなぐるものなり

と書いたのがありたので、それとなしに其生徒の家庭の様子を聞いてみると、果して夫婦喧嘩に絶間のなる家でありたと云ふことを話された、

子を持つてゐる親達は、萬事に氣をつけて慎まねばならぬ事であります、

三九 強盗にも良心の呵責あり

昔 一大強盗ありき、其縛に就くや晝夜を分たず野聲轟々枕を高ふして眠る、警吏其態を見、大膽不敵なるを叱す、渠強盗襟を正ふして曰く、郷の叱責實に理あり、然りと雖とも、予は安眠せざらんと欲するも能はざるを如何せん、吁かの罪を犯せしより爾來こゝに年を経る幾何ぞ、其間常に戦々競々として、薄氷を踏む如く、一瞬時の安息も之を得る能はざりし、小笹の露の風に碎くる音は警吏の我を襲ふたるに非るか、途上我顔を

見てホ、と笑ふものあれば、我罪を知りて之を嘲るに非るか、世の中の一事一物として、我を嘲り我を責めざるはなかりき、我豈晏然として枕を高ふするを得んや、然るに今縛に就くや其罪定めり、警吏我を襲ふの念なし、人の我罪を知りて官に訴ふるものなし、之を以て即ち然り、請ふ安眠を責むる勿れと、嗚呼良心の阿責それ恐るべきかな、

四〇 幼兒の一言父の邪心を翻す

或處に邪見な者がありて、人の作りし西瓜を、夜分人知れぬ様に盗みにゆき、六つになる子をつれて、其子を畑の入り口に立たせて置いて、誰ぞ來たらエヘンとこせきをせよと云ひさかし

て、親は畑の真中で、あの西瓜がよかろうか、この西瓜がよかろうかと、五ツ六ツちぎる折柄、今六ツになる子がエヘンと云ふた、そこで驚いて、坊よ誰ぞ來たかい、イ、エ、夫でも今こせきをしたが誰も來はせぬか、ハイ誰も來はせねど、空にれ月様がみて御座ると云ふた、そこで今の邪見な者も、やれ、誤り果てました、年も行かぬそなたでさる悪事と知りてれるのによい年かゝるた此親は大蛇か鬼か淺間布や、人の骨折りて造りた西瓜を、骨折らずに盗もうと、現在我子に盗みを教ふる人非人とは、我が事なり、其西瓜を造り主の宅へ持てゆき、改悔悔懺して、委細を話して斷りをのべ、それより従來の悪行を改め

たどある、

四一 正岡子規の悟りと生死

一世の才人正岡子規、病褥に呻吟すること數年、しかも猶筆を日本新聞に取りて「病牀六尺」を草す、中に云へることあり、曰く、

余は今迄禪宗の悟りと云ふことを誤解して居た、悟りと云ふこと、如何なる場合にも平氣に死ぬることと思ふて居たのは間違ひで、悟りと云ふことは、如何なる場合にも、平氣で生きて居ることでありた、蓋し半面の眞理を道破せるものか、

四二 リンコルンと文明人の禮節

米國の大統領アブラハム、リンコルンといふ人は、途中で黒奴に出遇ふた、黒奴は帽子を脱いて丁寧に挨拶をしたから、リンコルンも帽子を取りて同じく答禮をせられた、黒奴と云へば亞弗利加の黒色の野蠻人で、其時分には人間の仲間と思はれなんだ、牛馬と同様に鎖に繋いで賣買せられ、持主は之を驅り使ふ處の人間以下の者と考へられて居た、其黒奴に一國の大統領が、普通の人に對する様に禮儀をせられたから、側に見て居た人は驚いて、「何故あの様なものに禮儀を仕返じなさるか」と尋ねたとき、リンコルンの答へらるゝには、文明人が一人の野

蠻人たる黒奴にも及ばなぬで、禮法を知らぬ不作法者となるは耻かしいからである」と。この心掛がリンコルンの品格の高いことを示して居るではなぬか、世には目下なものと見て無暗に威張り散らかす先生達もあるが、御自身の品格を下げることに氣がつかぬとみるて誠に笑止の至りである、

四三

芭蕉庵桃青人の美を見る

芭蕉庵桃青、多年吉野山に櫻花を賞せんとして思ふに任せなかつたが、或年、其機を得て此處に遊ばんとし、大和國竹内村と云ふ處に來た、此村にれ今といふ孝女がありて、家は非常に貧乏であるが、其両親に事ふることは非常に感すべきである、

桃青これを憐みて金壹兩を與へて立去りたが、其爲めに旅費全く盡きて、花見に行くことが出さず、花を見棄て、空しく歸ることとなりた、或人が翁多年吉野の花を見んと欲し玉ひしに、幸ひ旅費を得て行きながら、之を人に與へ玉ひしは遺憾なことでござらぬかと云ふと、桃青の答へ、我の吉野に上らんとしたのは花の美を賞せんとしたのであるが、今は人の美を見たから少しも遺憾はなると云はれたとある、

四四

大山大將の同情

二十七八年役の當時、大山將軍が第二軍の司令長官となりて金州半島に上陸し、十一月二十日に旅順港の各砲臺を攻め取

りましたが、其時には随分澤山な捕虜がありたそうです。處が戦争の漸く終りた頃から、俄かに大雨がふり出しました。其最中に一人の捕虜は後手に縛られながら、雨の中になぶ濡れに曝されてゐる相手を大山將軍が認められ、直に部下の士官に命じて云はるゝには、あの支那兵は可愛そうに雨に曝されてゐるが、何所か雨のあたらしぬ家の中へ入れてやれ。もし家がなるならば、軍馬を引き出して其馬小屋の中でもよい、馬は雨にさらされても堪る得るけれど、人間は此寒さに終夜雨にさらされてはたまらまい」と云ふて、一人の捕虜を雨の中から、馬小屋へ入れさせたこと云ふことをさうしました。實に大山將軍の如きは

血あり涙ある帝國軍人の鑑鑑であらうと思ひます。

四五 張公藝と忍の字

唐の張公藝と云ふ人は、九代が間、一門眷屬一つ家に暮して居た、忝くも時の御帝、高宗皇帝、公藝の家に行幸まし、て、勅諭あるには、汝が家は年久しく親類同居して、中よく家治り相親むこと、甚だ以て奇特なることぢや、親類の中も年久しき中には、互に口舌もあるものぢやが、定めて一族相親むには、治めかたあるべし、具に申上げよと御諭ありければ、張公藝、謹んで忍の字百ばかり書いて献じ奉りたと云ふことぢや、忍とは堪忍の事で、此堪忍の道さる守らば、修身齊家治國

平天下、亦實に容易の業たるのみとの意である、

四六 ギリシヤの入佛式

ギリシヤ國に寺を建て、入佛式を行ふと云ふと、彼の國の風俗をみるて、佛様を馬の背にたゝせまして、馬には立派な装束をつけ、數多の信者が御迎ひに出て往來の傍にうづくまり、両手を合せ珠數かけて拜んで居る、處が馬が得たり顔して、れれはなかくゝるらい者ぢや、數多の人が手に珠數かけて拜んで居ると、反つて尻をふつてゆく、そこで馬丁が、馬鹿奴れのれれ誰が拜むものか、背の上に御座る佛様を拜むのぢやわい、もちウとあるけと鞭を上て打つとある、虎の威を借る狐士、御上

の威光を笠に着て威張る役人、禮那の御陰で馬車に乗る奥様、皆此馬の仲間である、

四七 迷信打破

唐の太宗皇帝出陣の砌り、或人が諫めて申す様には「今日往亡日で御座る、往て亡びると書いた文字なれば、出陣には大悪日、御延引遊ばさるべし」と申上たれば、其時太宗の仰せに、「それは出陣には大吉日、我往て敵亡びると云ふことぢや」とて、大きに喜び勇んで出陣せられたが、遂に其軍に勝利を得て、唐の代二百八十年の基を起された、
又我が日本にても、慶長五年冬十月、石田三成小西行長等が

五畿西海北陸の兵を卒いて亂を作せし時、徳川家の御先祖東照神君自ら大將と成て、關東の兵を卒て濃州關ヶ原へ出陣の砌り或る人諫めて申すには、「當年は西は塞りて御座る、方角を避けて御出陣あれかし」と申上たれば、其時東照神君仰せらるゝには「西が今塞がる故に我れ行て之を開くなり」とて、直に眞西に向ふて出陣なされた、其軍が果して大勝利となりて、遂に舊幕府三百年の御代がついた、斷じて之を行へば鬼神も避くるこやら云へば、吉日悪日なごをゑらばず、只斷じて之を行ふの決心如何と云ふことを、十二分に顧慮せねはならぬことである

四八 ライカルガスの教育演説

スバルタのライカルガス、一日市人を政廳に訪ひ教育の道を演説す、二匹の犬を牽き來らしめ、其間に二個の皿を置き、一皿には甘き物を盛り、一皿には肉を盛り、縛を解くに及んで忽ち走りて一犬は甘き物に向ひ、一犬は肉を食ひ盡せり、而も一辭の説明を與ゑず、市人皆怪訝の色をなせり、ライカルガス乃ち諭して曰く、抑も此二匹の犬は素と同胞なるが、生後直ちに引分けて其飼養を異にしたるにより、今見らるゝ如く、一は猛犬となり、一は柔しき犬となれり、人亦然りと云ひたりとなん

四九 職務に忠實なる電信技手

先年、亞米利加のミスシッポイ河が大洪水の折に其附近の電信局は非常に多忙でありました。電信局も亦水害を蒙りて水はだん／＼増てまいります。其中に一人の技手は平然として依頼してくる電信を取次いで、これを各地に打電してまいります。すると水は段々増して立つてれる技手の腰の處まで達しました。局内の人々は我一にと逃げ出したが、其技手は平然として打電してまいります。人々は早く逃げぬと逃げる事が出来ぬぞと云ひましたが、尙自己のせなければならぬ任務があるので、かまわずにやつてりましたが、終に其水が肩まで来た時に、「イマワレシス」と打電して置いて水に溺れたと云ふ話があります。

私 は實に尊き菩薩の様なる心懸ちやと思ひます、今自分の死ぬと云ふ時になりても、自分の任務を守りて（持戒）、少しも騒がず（禪定）不惜身命（精進）に苦みを忍んで（忍辱）、人々の爲めに（布施）打電して居たのは、これまことに正しき（智慧）いたし方で、彼の戦場に望んで、討死をした軍人と違ひなる美事であると云ふても差支ないです。

五〇 普明王と班足王

天竺の普明王は、戦争に敗られ、多くの家臣と共に敵の班足王に捕られたり。班足が普明王に云ふには、吾汝を暫く國に歸すへし、期を約して歸り來れど、普明喜んで本國へ歸りしが、

期を違へず歸り來る、班足驚き問ふて曰く、汝再び敵國に至る、身命惜からずやと、普明王答て曰く、虚妄によりて活さんよりは、眞實にて死するを喜ぶと。敵の王此語に感じ、彼は賢者なり、かゝる賢者と戦ひたるこそ後悔なりとて、捕ふるところのもの一人も残さず、本國へ歸されたとある。これ一人の眞實が千萬人の命を助けたのである、

格言

一 政治

- 邦國の政治は人民光輝の反照なり DスマイルスD
- 自由は一種の植物の如く憲法は其園圃の如し DリーブルD
- 帝王の爲めに最も確實なる護衛は兵にあらず金にあらず民心なり DペトラークD
- 公道は世界の正當なる君主なり DセンターD
- 自由の爲めに劔を抜くは勇者に取りて眞正の名譽なり

田カレガカス田

◎功成り名遂げて身退くは天の道なり

田老田子田

◎公は明を生じ偏は闇を生ず

田荷田子田

◎身を修むる者は精を積むを以て資とす、國を治むる者は賢を

積むを以て道と爲す

田季田國田

◎其身正しければ令せずして行はる其身正しからざれば令すと

雖とも行はれず

田孔田子田

◎士を制するに權を以てし士を結ぶに信を以てし士を使ふに賞

を以てす

田三田略田

◎國に良臣の亡ぐるを患ひ家に諫言の絶ゆるを悲しむ

田平田重盛田

◎仁惠は劔を帯びずして能く國を治む

田西田諺田

◎豪俠なる政策と公衆の尊榮幸福とは絶つべからざる關係なり

田ワシントン田

二 法律

◎腐敗されたる社會には數多の法律あり

田シヨンソ田

◎善人は法律を恐れず却て身體を安全にするを得、法律を恐る

ゝは獨り悪人のみ

田コツシン、シヤ田

◎一人を殺すものは悪人と稱せられ、數百人を殺すものは英雄

と稱せらる

田ボーテアス田

◎心を勞する者は人を治め、力を勞するものは人に治めらる、

◎孟 子

◎罪疑はしければ惟れ軽くせよ、功疑はしければこれ重くせよ

其不辜を殺さんよりは寧ろ不經に失せよ

◎尙 書

◎自由は法律の許す所のものを爲すの力に由りて成る

◎シ セ ロ

三 宗 教

◎一國の方は宗教にあり

◎メン、ジョンソン

◎神と父との前にありて純粹且つ高潔なる宗教は憐れなるもの

を救ひ、已れを警めて、塵世に汚れざらしむるにあり

◎シエームス一世

◎宗教は人生の法則なり

◎ピーコンスフキールド

◎宗教は人生の真正なる幸福に冷淡ならず

◎バックスミンスター

◎宗教によらずして人を教育するは伎倆ある悪魔をつくるなり

◎ウエリント

◎宗教とは無限に依頼する念なり

◎シエラインマツケル

◎宗教とは完全なる自由なり

◎ヘーゲル

◎宗教なき人は手綱なき馬の如し

◎羅馬古諺

◎神人を造らず、人神をつくる

◎オフエルバツ

◎人間の生命ある所には何處にも宗教なり

◎マクスミエラー

◎大人は勢力と知識とのみを以て其大をなすこと能はず崇敬の心と慈惠の心と年を積み時を累ねて其大をなすなり

○ラニソン

四 教育

◎學校は人間の製造場なり

○コメニヤス

◎兒童は父母の行爲の映照する鏡なり

○スペンサー

◎生徒將來の禍福は殆んど教師の掌中にあり

○ホルセント

◎精神を書籍の犠牲とするなかれ

○スペンサー

◎今日の兒童は明日の大人なり

○ホレスマン

◎教育は人の性を變換するものにあらず、唯善く之を修繕する

のみ

○アリストートル

◎不能の文字はひとり愚人の字書にみるなり

○ナポレオン

◎教ふるは學ぶの半なり

○禮記

◎古枝は折れ易く、新枝は矯め易し

○西語

◎一人の惡母は五十の惡兒を生ず

○同上

◎世に善良の教育を施す學校に三種あり、家庭の學校、學校の學校、社會の學校、即ち是なり

○スマイルズ

◎一家は習慣の學校にして、父母は習慣の教師なり

○編譯論言

◎教育を受けざらんよりは、寧ろ生れざるに如かず、何となれ

は無識は不幸の原因なればなり
① アラト

少年と白紙は如何なる者をも印記せらる
② 英國 狸 彦

五 眞理

眞理は死せず
③ セ 子 カ

奇なり、奇なれども眞理なり、眞理は奇なり、小説よりも奇なり
④ パイロン

如何なる快樂と云へども、眞理の要地に立つことには比すべからず
⑤ ベーコン

眞理は人間の保持し得る至上のものなり
⑥ チョンコン

六 讀書

讀書の價值ある書は買ふの價あり
⑦ ラスキ

書を選ぶは友を選ぶ如くせよ
⑧ チョイチリアナ

書は宇宙を讀む眼鏡なり
⑨ ドライデン

書は光炎々あるを要し、老大なるを要せず
⑩ ホービー

好書の著述は戦争に劣らざる大事件なり
⑪ デスレリ

一讀の價值ある書は再讀の價值あり
⑫ チョン、モーケ

書は善良純潔なる一世界なり、人之を周圍して、血肉活動し人之を玩戯して福趾生長す
⑬ サオーツケオリス

書を讀む人に三種あり、曰く蟻的、曰く蜂的、曰く蛛的、

⑭ ベーコン

◎書籍の備へなき室は人體に精神なきが如し ○シ・セ・ロ

◎書籍は少年に對しては誘導者たるべく、老人に對しては慰藉者たるべし、 ○コリアー

◎假令印度の財寶を擧るも讀書の愛にはかへ難し、○ギツホン

◎讀書は鞭撻を加ふることなく、吾人を教ゆる教師なり、 ○リチャード・バーレー

◎學者墨汁の一滴は、義者の流す血と等しく貴し、 ○アラビア格言

◎汝書を讀まんと欲せば宜しく文字を讀むなかれ、而して其心を讀め、汝傳記を讀まんと欲せば、其記事を讀むなかれ、而

して其人物を讀め、
◎人有字の書を讀むを解して無字の書を解せず、人有絃の琴を弾くを知りて無絃の琴を弾かず、
◎書を讀まば心得躬行を貴ぶ、
◎經を讀まば宜しく我心を以て經の心を讀むべし、
◎我心を釋すべし、
◎未だ嘗て見ざるの書を讀み、未だ嘗て至らざるの山水を經るは、至寶を得て異味を嘗むる如し、
◎我れ未だ見ざるの書を讀めば良友を得たるが如く、已に讀めるの書を見れば故人に逢ふが如し、

○カ・マ・ノ・ル

○茶根譚

○大塩平八郎

○佐藤一齋

○謝肇淪

○陳繼儒

るの書を見れば故人に逢ふが如し、

○今日に於ける眞箇の大學は佳良の書籍館なり、
○カーライル

○書にして若し衷心より出たる者ならば、必ず他人の衷心に透
徹すべし、
○肩 上

○舊書を温ぬるは新書を讀むに九倍の益あり、
○西 謔

七 道徳

○徳は香氣の如し之を碎けばいよく香ばし、
○メーコン

○已れ徳を有せざる人は他人の徳を羨まず、
○肩 上

○死後も尙貴きは徳行のみ、
○ヤシグ

○天下に唯一の高價なるものは一の徳あるのみ、
○ロジニサエナル

○徳行と眞理とは最も美麗に、且つ最も愛すべき二人の天女な

り、
○ペーコン

○悲哀なる境遇、痛苦なる状態は、徳をなす所以の學なり、
○テイロル

○後悔は已に失ふたる徳の反響なり、
○バルワ

○徳は最高の官爵なり、
○モ一ラ

○金錢は徳義の毒藥、
○シセロ

○陰徳ある者は必ず陽報あり、陰行あるものは必ず昭名あり、
○淮南子

○恩は猶負債の如し、返却せざるべからず、
○西 謔

○徳を躬に行ふて生活するに非れば、安樂に生活する能はず、

◎乞食の衣服にありても、徳行は威ありて敬ふべし、
Dシセロ

◎父の徳行は子の爲めに最上の遺物なり、
D英國の諺

八 知識

◎知識は文明の基礎なり、
Dホーレンス

◎知識の途は即ち快樂平和の途なり、
Dソロモン

◎知識なき智恵は瞞着にすぎず、
Dメンシヨソソ

◎未知より已知に進み、有形より無形に進み、一物より一般に及び、易より難に及べ、兒童の心は大なる倉庫の如し、

- ◎知識は心意の食物なり、
Dエスハート
- ◎幸福の秘訣は知識を得るにあり、
D西 諺
- ◎智恵は仰ぐ時よりも俯す時に近し、
Dヴォイツォルズ
- ◎目的を定めざる發砲は命中することなし、
D西 諺
- ◎予は富んで無識ならんよりは、寧ろ豚たらんと欲す、
Dスホール

九 労働

◎天は労働せざる人を助けず、
Dソフオクルス

◎汗を出さなければ甘さものを得ず、
D西 諺

◎職業に努力せよ、然らば汝は安全ならん、
田オウ井ツト田

◎勞力より休息を生ず、
田ロングツエルロ一田

◎休息は勞役によりて得べく、勝利は戰鬥によりて得べし、
田トーマス、アケンピス田

田西 諺田

◎早く起る鳥は餌を得ること多し、
田同 上田

◎根の苦きものに甘き實を生ず、
田ラボツク田

◎勞働の外人によき物を興ふるものなし、
田キングスレ一田

◎自己の階級をすて、上らんとするものは、これ虚儀に入るものなり、予は信ず小作人は小作人、職工は職工として、同時に聖人たり學者たり紳士たるを得る、

田同 上田

◎人の精力を出して職事を務むることは、最も善き實事習験の學問なり、
田スマイルス田

◎稼ぐに追ひつく貧乏なし、
田西 諺田

◎老ひては若き時より多く働かざるべからず、
田同 上田

◎眞正の職業は假令手工の勞働たりと雖とも、而も其職業の一字中には必ず皆神聖の意を寓するなり、
田カーライル田

◎健康は富に優れり、
田英國の諺田

一〇 名譽

◎名譽は鴻業の香氣なり、
田ソグラデ一ス田

◎男の名譽の重なるものは勇氣に存し

田同 上田

女の名譽の重なるものは貞操に存す、
DスベクタータD

◎人生に於て貯へ得べき最純潔なる財寶は無垢の名聲なり、
DシエクスピアD

DシエクスピアD

◎死して名を貽すは生きて耻を曝すにまされり、
DソクラテスD

DソクラテスD

◎不朽の名譽はひとり徳に存す、
DペトラーニスD

DペトラーニスD

◎名譽を失ふは已れを失ふなり、
DンエクスピアD

DンエクスピアD

◎名譽は徳に隨ふこと恰も影の如し、
DシセロD

DシセロD

◎名譽を得るの秘傳は正直を行ふにあり、
DペーコンD

DペーコンD

◎芳名は巨萬の富に優れり學習は金錢に優れり、
Dチャーレス、ノルゼントD

Dチャーレス、ノルゼントD

◎名譽と利益とは一囊に貯へ難し、
D西 諺

D西 諺

◎名聲は萬世不朽なり、
D同 上

D同 上

一 一 勤勉
◎勤勉なる鋤は光澤あり、
D西 諺

D西 諺

◎勤勉の人は萬物を化して黄金となすの術あり、光陰といへど
Dロシク、フィルドD

Dロシク、フィルドD

◎光陰は人に供するに建築材料を以てす、今日と云ひ昨日と云
D同 上

D同 上

◎誠實と勉強とを不易の友となせ、
DフランクリンD

DフランクリンD

◎吠ゆる犬の用は眠れる獅子よりも大なり、立てる農夫は座せ

西 藤

ロドインソイゾロ

る紳士よりも高し、

◎勉強は成功の母なり、

◎淵に臨んで魚を羨まんよりは、退て網を結ぶに如かじ、

◎勉強は老後に食物を得べき最上の保険なり、

◎業の成ると成らざるは勤むると惰るとにあるのみ、故に不

肖も勤れば賢となり、智も惰れば不肖となる、

◎懶惰の人は光陰を殺し、黽勉の人は光陰を活かす、

ロコルレツチロ

◎黄金世界は已に去れり然れども善人之を回復す、

ロシルレルロ

◎勤勞は市民の譽れなり、

◎間断なき軒滴は石を穿つ、

◎勞力なければ安樂もなく休息もなし、

一一 信 仰

◎信仰はあらゆる智識の極度なり、其端緒にはあらざるなり、

ロゲーテロ

◎信仰に惑ひながら行に於て清きものあり、不完全なる信條よ

りも寧ろ篤實なる疑の中に深き信仰あり、

◎上帝に對して信心を失ふものは人間に對して信用を失ふ、

ロシセロロ

◎最も神聖なる堂宇は各人の心裡に存す、

ロタシタスロ

◎誠實なる疑團中には却て信仰の種を藏む、
Dテニソン

一三 成功

◎成功の秘訣は目的の一定不變なるにあり、
Dビーコンス、フキルド

◎萬人は失敗し一人は成功す、
Dテニソン

◎高尚なる失敗は卑汚なる成功にまさる、
Dモリス

◎大事は力によりて成るにあらず、不屈不撓なるによりて成る
Dマモンソン

◎予は只勤勉と積累とによりて、わが業を成就したり、
Dダルトン

◎正道を以て行へば目前には迂遠なる様なれども先に行けば
D西郷隆盛

◎成功は早き様なり、
D西郷隆盛

◎希望は成功の基なり、
D西郷隆盛

◎徐に急げ、
Dシーザー

◎人生の長短は常に功程の多少を以て之を計るべし決して日月
の長短を以て之を量るべからず即ち功程あるものは少年も猶
大人なり功程なきものは老人も尙小兒なり、
Dモリス

一四 忍耐

◎忍耐は凡ての門戸を開く、
D英國俚諺

◎堪へ難きに堪ゑたることは想起す毎に愉快なり、
Dセリソカ

○當然の苦痛は不平を鳴らすとして、これを忍べ田ナホレオシ

○一忍以て百勇を支ふべし田ナホレオシ

一静以て百動を制すべし、
田ナホレオシ

○忍耐は快樂の門なり、
田ナホレオシ

○堪忍を以て城とし油断を以て敵とすべし、
田ナホレオシ

○忍耐せよ兵士頓て大將とならん、
田ナホレオシ

○諍論は一方の堪忍に終る、
田ナホレオシ

○樂を得んと欲せば先づ苦を忍べ、
田ナホレオシ

○勝利は能く忍ぶ者に歸す、
田ナホレオシ

一五 正心

○正心は最善の方便なり、
田ナホレオシ

○心だに正しかりせば萬物は皆汝が生涯の明鏡たるべく、又神またしん

聖なる教訓の書籍たるべし、
田ナホレオシ

○正しからざるものは大なること能はず、
田ナホレオシ

○不正に得れば不正に費す、
田ナホレオシ

○正を踏んで恐るゝなかれ、
田ナホレオシ

○口の過なきより身の過りなきは固く、身の過なきより心こころ

の過なきことは難し、三のものともに禮を以て正さずんば

あるへからず、
田ナホレオシ

○悪しからんより貧しかれ、
田ナホレオシ

一六 精神

○身體を富ましむるは精神なり、
DシエクスピアD

○勞作は身體を教養し學習は心靈を教養す、
DスマイルスD

○形體は殺さるべきも精神は殺すべからず、
DコリンスイアンスD

○人其田に糞ふを知りて其心に糞ふを知らず、
D劉向説苑D

○世界の事は猶不倒翁の如し時に悪しき如くみるしこともいつか善くなること、不倒翁の常に倒れつゝ倒れざるに似たり、
DエマールソンD

○人皆身の安否を問ふを知りて心の安否を問ふを知らず、
D佐藤一齋D

○手を働らかしむる前に頭を働らかしめよ、
D英國俚諺D

一七 改過

○過て改むるに憚ることなかれ、
D孔 子D

○君子の過は日月の蝕の如し過つ時は人皆之を見る、更むれば人皆之を仰ぐ、
D子 真D

○聖人過多く賢人過少く愚人過なし、蓋し過は學んで後に見らるゝなり、學ばざるものは冥行妄作以て常となし復過を知らず、
D薛貞襄公D

○人過ありたる時これを辨解する程の勞力を以て自ら徳行を勵まば謗即ち止む、
D横瀬淡窓D

◎我手を洗へども、遂に全く清らず、
DルイタイルD

◎我は言ふ最大の過は其過の多きにあらず自ら見て過なしとするにあり、
DカーライルD

◎人の過あるは固より悪し而して過ちて之が辭を爲すは更に又一失を加ふるなり不善焉れより大なるはなし、DパスカルD
◎初め犯す所の過失は甚だ少なるも之を掩はんと欲して行ふ所の悪事は却て大いなり、
DロシフコイルD

一八 艱難

◎艱難汝を玉にす、
DカーライルD

◎世界は大學校なり、困苦は良師友なり、
DカーライルD

◎困難いよ、多ければ勞苦をなすべく、危険いよ、甚しければ勇氣をあらはすべし、
DナビールD

◎艱難に優れる教育なし、
DビーコンフキールドD

◎不幸なる人にして初めて慈善心の價值を知る、
DルーソD

◎不幸に遇はざるよりは不幸なるはなく、禍災を知らざる人より禍災なるはなし、蓋し災難禍患は其手を以て人に示すに、
DケラールD

◎老成練達に至るべき道途を以てせり、
DケラールD

◎若し大石道に横るあれば、儒者は見て行路の障碍となし、勇
DカーライルD

◎ある者は以て進歩の階梯となさむ、
DカーライルD

◎辛苦の事は卓越の才に進むべき道程なり、絶好の地位は辛苦

○の人の得べき恩賞なり、
○レインブルツ

○艱難にねて始めて眞友を知る、
○シセロ

○確乎不拔の人は艱難を意に介せず、
○タミール

○艱難は徳の親なり、
○アルターク

○身艱難にあは、宜しく古人の之にあへるものを思ひて心を安

すべし、
○貝原益軒

○辛酸を嘗めて心鐵の如し、
○梁川星巖

○艱難は假面を被れる幸福なり、
○西 諺

○艱難に遇はざる者は奇蹟の今も尙現に行はれつゝあるを信せ

ず、
○ゲーテ

○危難は人間の眞正なる試金石なり、
○西 諺

○心樂ければ行路の難さを覺へず、
○同上

○不平は智慧と力となき人の負ふべき重荷なり、
○同上

一九 眞實

○眞實は勇氣の源なり、
○アウガスチン

○眞實は萬事の大本なりあらゆる才力の最大要素なり、
○カーライル

○水瓢に満つるときは音せず、
○伊藤東涯

○書にして若し衷心より出たるものならば必ず遂に他人の衷心

に透徹すべし、
○カーライル

○一寸の鐵も能く鍛へば人を殺すべし、三尺の劍も鈍ならば人を傷くるだも能はざらん、
○室鳩巢

○信義を重んぜざれば永く家産を保つこと能はず、
○西 諺

二〇 實行

○行爲は言語よりも尊し、
○D ヒーコンスフ井ノルド

○吾人は頭より論じ、心より働く、
○D フ井ノルチング

○多く事を爲すは易く一事を永續するは難し、
○D シエクスピア

○言ふ人は行ふ人にあらず、
○D ルーソ

○大なる善を識得せんと欲せば、小なる惡に注意せざるべからず、

○D ルーソ

○合抱の木は毫末より生じ、九層の臺は壘土より起り、千里の

行は足下より始まる、
○老 子

○知は行の始めなり、行は知のなるなり、
○王陽明

○三たび思ふて而して後に之を行ふ、
○季文子

○天下を動さんと欲するものは必ず先づ自ら動くべし、
○ソクラテース

○死せる獅子は小鳥も之を啄む、
○西 諺

○二兎を逐ふ者は一兎を得ず、
○同上

○道を行ふものとなれ、聞く者とならなかれ、
○同上

○耳は大なるべく、名は小なるべし、
○同上

◎戦國の英雄武功を爲さんと欲せば、必らず大膽ならざるべからず、又兼て謹慎ならざるべからず、

田ナホレオン第一世

◎苟も實業界に雄飛せんとする者は、一方には驚くべき程、

大膽猛氣ならざるべからず、而して又一方よりは驚くべき程、

細心慎重ならざるべからず、即ち大膽と慎重と二者相合して

茲に商界雄飛の質をなすべし、これ商戰場裡の一大秘訣なり、

ドロステイイル下

二 悔悟

◎神は悔悟を人類の美德となせり、

トルテール

◎天の作せる摩は猶ほ避くべし、自ら作せる摩は避くべからず

(伊 月)

◎少年の時犯せる罪過は老年に及んで鞭撻をうく、

ミブホー

◎光明は已れを示し又闇をも辨ず、

スピノサ

◎光り多き處には影深し、

デーテ

◎豫防は後悔に勝る、

(西 諺)

◎誤謬を認識するは真理に入る階梯なり、

同上

三 立志

◎立志の功は耻を知るを以て要とす、

佐藤一齋

◎三軍も其帥を奪ふべし、匹夫も志を奪ふべからず、

(孔 子)

◎真に大志あるものは能く小物を勤め、

◎真に遠慮あるものは細事を忽にせず、

◎志の一字は初學より聖人に至る迄學問の全體なり、

○三輪執齋

◎膽略と決心とは積徳の精神、

○西 諺

◎其志を堅くする者は遂に世に勝つ、

○ゲ ー テ

◎志は其人の幸福なり天國なり、

○シルレル

◎志立たざれば、舵なき舟、轡なき馬の如し、

○全陽明

三三 惜陰

◎規則は光陰を擒ふる術なり、

○ゲ ー テ

◎往日の隙を逐ふことなかれ、來日の杳かなるを逐ふことな

かれ、唯一日目下に勤めて善を爲すのみ、

○川井東村

◎過去に慮り、現在に働き、未來に楽しむ、

○ビーコンス、フイルド

◎果決の人は忙に似て心中常に餘間あり、

◎心中常に餘累あり、

○呂新 呂

◎凶日は失せし日なり、即ち悪しく費せし日なり、

◎分毫も光陰を失へば懊帳に堪へず、

○下ツクヴィル

◎因循は時の賊なり、

○西 諺

◎今日爲されざる所の事は明日も爲されず、

○ゲ ー テ

◎技術は長し、生命は短かし、判断は六かし、機會は失せ易し

◎同 上

◎燦めく者は只一瞬の間のみ、

◎同 上

◎時は人に付き添ふ天使なり、

◎機會は鳥の如し、其未だ飛ばざるを執へよ、

◎西 諺

◎人生の大費は時を費すに過るはなし、

◎英國俚諺

◎時間を失ふより大なる罪はなし、

◎俚 諺

◎善は急げ、一日延れば千日を後る、

二四 希望

◎希望は我が勢力なり、

◎スマイルズ

◎希望は苦痛の爲めに最良の音楽なり、

◎英國俚諺

◎希望は思想の父なり、

◎シエクスピア

◎失望は痴人の斷案なり、

◎ヒーコンスフ井ールド

◎艱難中に希望快樂あり、

◎ペーコン

◎艱難には忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ

◎希望は耻を知らせざるなり、

◎ポーロ

二五 克己

◎克己は勝利の最大なるものなり、

◎ララトード

◎情慾を制せよ、否らざれば情慾の爲めに制せられん、

◎ホレーズ

◎全世界を知るは易く己れを知るは難し、
Dス、フランチース

◎山中の賊は討ち易く、心中の賊は討ち難し、
D至陽明

二六 慎言

◎慎みは徳の守りなり、
D國語

◎一旦口外せる言語は、飛び去りて止むること能はず、
Dホレリス

◎言ふべきの事を知る人は、亦黙すべき時を知る、
Dマイキメダス

◎偉勳を奏する人は言語の慎むべきを知る、
Dトリランダ

◎沈黙は聰明を養ふべき睡眠なり、
Dペーコン

◎言多ければ品少し、
D海氏河海録

◎貌言は花なり、至言は實なり、
D史記

◎苦言は藥なり、甘言は病なり、
D史記

◎良薬口に苦くして病に利あり、
D孔

◎忠言耳に逆ふて行ふに利あり、
D子

◎言語は勅作の羽翼なり、
Dラプエーダー

◎言寡きときは即ち謗を省き、慾少きときは即ち身を保つ、
D冠業

D公

◎多言なれば數々窮す、中を守るに如かず、
D老

◎口を守ることを瓶の如く、意を防ぐことを城の如し、
D柴

◎多言最も人の心志をして流蕩せしめ、而して氣も亦損ず、少言惟に徳を養ひ得ること深きのみならず、又氣を養ひ得て而夢寐亦安し、

薛敬軒

二七 戦闘

◎大膽なる進撃は戦の半なり、

日耳曼傳

◎勝利は能く忍ぶものに歸す、

ナポレオン

◎勝利の時に當り己を制する人は、再度の戦勝者なり、

バプリア、サイラス

◎内に良軍帥なくんば、外にある大兵は待むにたらず、

スイトル

◎欠乏困苦は兵家の學舎なり、

ナポレオン

◎敗れたる轉瞬の間に、勝つべき轉瞬の期會あり、

同上

◎百戦百勝は善の善なるものにあらず、戦はずして人の兵を屈するは善の善なるものなり、

孫子

◎勝敗の決は最後の十五分間にあり、

ナポレオン

◎我は最も正しき戦争より、最も正しからざる平和を取らん、

シヤロ

◎戦争にても戦争は最後の目的に非ず、

シルレル

◎固有の力を持し深く藏して見はさずば、幾多の勝算この裡に立つべし、

酒井忠直

二八 幸福

○幸福は凡て心にあり、

○英國俚諺

○眞の幸福は満足せる精神中に之を發見することを得る、

○ホノレース

○眞に幸福ならんと欲せば、其土地を廣大にすることを學ぶべからず、其希望を縮少するを學ぶべし、

○プラーイト

○王にせよ農にせよ、其家に於て平和を見出すものは、最幸福の人なり、

○ゲーテ

○人を恵むは恵むものにも恵まるゝものにも幸福を興ふ、

○シエキスピア

- 幸福は徳の報酬にあらずして徳其物なり、
○スピノサ
- 満足する者は幸福なり、
○西諺
- 一日の快樂は一年の苦痛となる、
○同上

二九 心

○心を良田と爲して百年之を耕し盡さず、善を至寶として一生之を用ゐて餘りあり、

○管仲

○心を以て心をかくす心の中又心あり、

○予は予が人民を改良するを得たれども、予が心を改良するを得ず、

○補正成

○華美慢心は隣敵の如し、

◎ 社會の親疎愛憎は我が心の影と知れ、

◎ 人は皆眼二つあり、さとりぬれば眼三つなり、心に一の眼な

くては、見難き處は見出されず候、

◎ ア、人の心程解らぬ者はよもあらじ満足なき世に満足を求め

て日夜苦勞す、

◎ 心の奔る所は即ち天命の聲なり、

◎ 悪人は死すとも悪事は死せず、

三〇 人

◎ 人は小天地なり、萬物皆我に備はれり、

◎ 人は唯人に照して自ら知る、

◎ 澤庵和尚
◎ ゲーテ
◎ シルレル
◎ 西 諺

◎ エマールソン
◎ ゲーテ

◎ 春風以て人に接し、秋霜以て自ら肅しむ、

◎ 人の一生は重きを荷ふて遠きに行くが如し、

◎ 人の研究すべきは人なり、

◎ 天下に主たるものは、城を以て城とせず、人を以て城と爲す

◎ 酒井忠勝

◎ 人生は悲の相續者なり、

◎ 世人の多くは大道を知らずして醉生夢死するなり、

◎ シェクスピア

◎ 恩に負くことは愚の一なり、

◎ 人は決して欺かれず唯自ら欺くのみ、

◎ ゲーテ
◎ 同上

◎顔は精神の門なり肖像なり、
Dシセロ

◎人は凡て三事を要す、名譽、富、快樂これなり、
D西 謬

◎人類を支配する者は想像なり、
Dナボレオン

◎健康ならざれば人の生命は眞の生命にあらず、
D希臘の諺

◎人それ健康を保つは、各自人類としての一義務なり、
Dスペインサ

◎運命の循環は水車よりも速なり、
Dクキゾ

◎健康快樂を生じ快樂又健康を生ず、
Dスペクテーター

三一 死亡

◎死の道は誰も旅せざるべからず、
Dホレウス

◎世界は旅店なり而して死は旅行の終りなり、
Dブライデン

◎死は愉快なる事にて如何なる感覺もこれに及ぶものなし、
Dフィンロー

◎英雄は死所をゑらばざるべからず、徒らに死すべきにあらず
Dフレデリック大王

Dフレデリック大王

◎感慨身を殺すは易く從容義に就くは難し、
D程氏遺書

三二 勇

◎不敵の勇は勝利の基礎なり、
Dブルタック

◎未だ危険に會せざるものは、其勇ありや否やを答ふべき資格
Dロシフモウ

なし、

Dロシフモウ